

府中市埋蔵文化財調査報告 第249集

武蔵国府関連遺跡調査報告

宮町1-28-20外地区集合住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1969次)

2025.5

株式会社 中野技術

例　　言

1. 本報告書は、「府中市宮町1-28-20外地区」の集合住宅及び店舗建設工事に伴う「武藏国府関連遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の調査は、株式会社マリモと府中市教育委員会及び株式会社中野技術との協定に基づき、府中市教育委員会指導のもとに、株式会社中野技術が実施した。調査に係る費用は株式会社マリモが全額負担した。
3. 本調査地は、府中市宮町一丁目28番20, および28番21, 29番2, 29番20, 29番24, 29番25に所在する。
4. 調査期間は次のとおりである。

発掘調査：2024年3月5日～2024年6月7日

整理調査：2024年6月1日～2025年5月31日

5. 調査対象面積は、252.1m²である。
6. 本調査は、府中市における発掘調査通次数の1969次調査であり、府中市教育委員会指導のもと、株式会社中野技術文化財技術部の根本靖が担当し、福泉藍が補助した。
7. 本報告書は、府中市教育委員会の佐藤ななみ氏の指導のもと、根本が作成した。執筆に関しては、第1章第1節を佐藤が、その他を根本が担当した。
8. 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会発行の『府中市埋蔵文化財調査報告 第〇〇集』は『報告〇〇』、『武藏国府の調査〇〇』は『概報〇〇』と略した。
9. 第二原図の作成と図面や写真の編集は、Adobe社のIllustrator, InDesignなどのソフトを利用して作成した。
10. 本調査で得られた出土遺物・写真・記録類は府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課が管理・保管している。
11. 発掘調査・遺物整理・報告書作成にあたって、下記の諸氏、諸機関からご教示とご協力を賜った。記して感謝申し上げます（順不同、敬称略）。

鶴間正昭、松本太郎、鈴木敏則、古屋紀之、中嶋友、田尾誠敏、宮原正樹、宇高美友子、
公益財団法人横浜ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター

調査機関　株式会社中野技術　文化財技術部

総括責任者　清水理史（文化財技術部　部長）

調査担当者　根本　靖（文化財技術部　文化財調査課）

調査補助員　福泉　藍（文化財技術部　文化財調査課）

現場作業参加者

植村智美、川口砂織、手塚哲也、松尾貴弘、久津輪弘樹、北原和一、臼井大輔、
臼井孝、高橋広幸、高橋貴子、藤田悠介、原野真祐、石橋佳奈、高橋遙香

整理作業参加者

大原美紀、加藤洋子、坂井美樹子、佐貫　健、榎原みゆき、櫻井亜矢子、徳光直子、
山本圭子、明石千とせ、石川まゆみ、井上麻美子
(以上、順不同)

凡 例

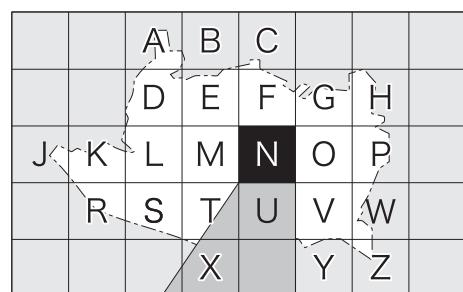
1. 調査地区の位置について（グリッド）

調査地区の位置表示にあたっては、府中市遺跡調査会独自のグリッドを使用している。これは、府中市を大きく24区（A～Z、大グリッド）に分け、さらにそれぞれの大グリッドの中を100区画の中グリッドに分けている。例えば全体図に付いている「N51」は「N」が大グリッド、「51」が中グリッドを示している。これにより府中市内でのおよその位置が確定する。さらに中グリッドは3mごとに小グリッドのラインがあり1辺を50等分している。これにより正確な位置が割り出せる。例えば「N51(10, 18)」は、「N51」区で中区画の南西角を基準とした東方向10番目のラインで小グリッド(10)、北方向に18番目のラインで小グリッド(18)交点を示し、またここを南西角とした3m四方の範囲を示す。そして、全体図は小グリッド網から切り取った状態で表示している。

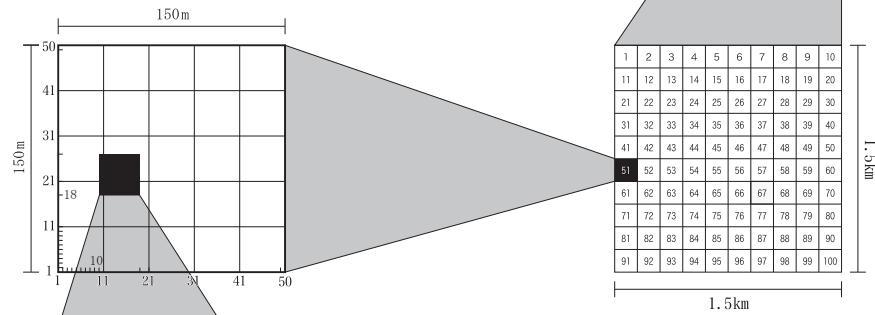
府中市の位置



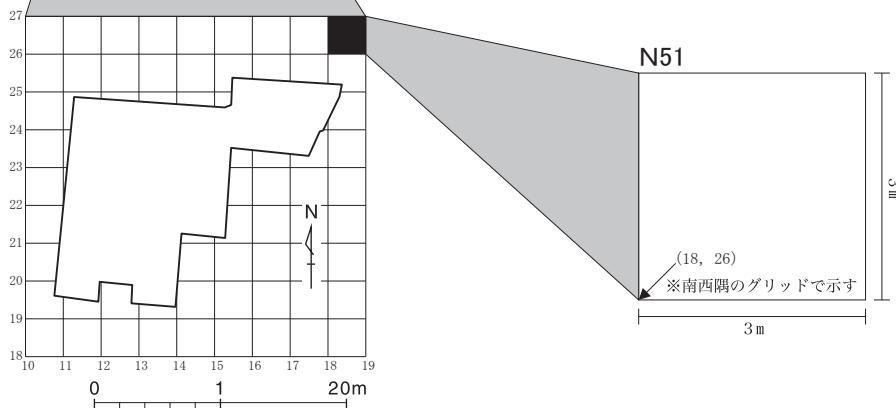
府中市の大グリッド「N」の位置 (1/200,000)



N51区内のグリッド (10~19, 18~27) の位置 (1/5,000)



N区の中グリッド「51」の位置 (1/50,000)



1969次調査地区全体図 (1/600)

2. 遺構番号について

- ・遺構はそれぞれ次の記号で表されている。

S B = 堀立柱建物跡, S D = 溝, S I = 壓穴建物跡, S K = 土坑, S X = その他の遺構。
P = 遺構に伴わない単独の小穴。

これらの遺構は、中区画ごとに連続した番号を付けている。例えば1969次調査の「N 51 - S I 301」はN 51区画において検出された301番目の壓穴建物跡を示している。また、P 45の45はN 51区画における今回調査の通次番号である。

3. 全体図について

- ・遺構の重複関係の表示は原則として次のとおりである。

 a b 明らかに a が b を切り、 b が壊されている。

 a b a が b を切っているが、 a の下に b のプランが確認された場合。

 a b a が b を切っているが、 プランでは確認できず想定ラインで示した場合、 また推定ラインを入れる場合もある。

- ・図中のトーン・ライン等については次のとおりである。

 竈(詳細を図示したものはトーンを入れていない)

 硬化面範囲

 搅乱(現代に掘られたか埋められた建物基礎やゴミ穴など)

 切られる遺構のライン、 または地中のライン

 想定ライン

 建物・柵等の柱のつながりを示すライン

4. 遺構個別図について

- ・図中のトーン・ライン等については次のとおりである。

 竈

 竈 a

 炭・炭化物範囲

 地山

 竈 b

 柱アタリ範囲

 貼り床

 竈 c

 炉・焼土

 その他の硬化部分を示す

 搅乱の接点を示す

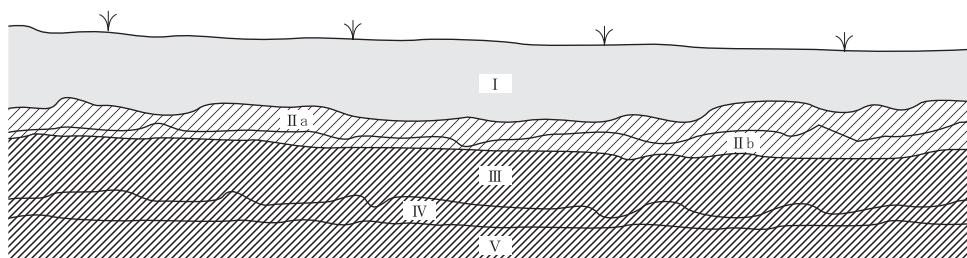
 推定線

5. 府中市の基本土層について

府中市の遺跡の基本土層は、『報告1』で規定されて以来、表土層(第I層)からハードローム層(第VI層)まで順にローマ数字とアルファベットにより表記されるようになっている。ローム層より上位の黒土層を4ないし5層と細分が進んだが、そのため武藏野標準土層との相違が生じている。府中市内の遺跡では、現在でも基本的には『報告1』の府中層位名で記載している。本書では以下に立川段丘平坦面の標準的な土層断面を図示した。

層序	色調	特徴	時代(包含する遺物)
第I層	灰褐色土	感触はサラサラである 耕作土	近世～近代・現代
第II a層	暗褐色土	黒色味がやや弱い	古代・中世
第II b層	暗褐色土～黒褐色土	黄色スコリアが多く感触はボソボソである	古墳・古代
第III層	黒褐色土	縮りがあり、やや粘性が強い 遺構確認面(武藏野II b層)	縄文時代
第IV層	暗褐色土	ローム漸移層 第V層のブロックが混ざる	縄文時代
第V層	黄褐色土	ソフトローム層(武藏野III層)	旧石器時代

武藏国府関連遺跡 基本層序(立川段丘平坦図) 土層断面図 府中町2丁目付近



6. 遺構図土層注記の内容について

原則として数字とアルファベット(大文字・小文字)及び丸囲み数字の組み合わせ(下記参照)で各遺構図の近くに表示している。

なお、主体となる土とはその土層中最も多い土を指す。混入する土については、混入する土の種類と粒ブロックの大きさ、混入の割合を示している。主体となる土の内0(粘土)は、本文中で特に記さない限りは竈用材などとして用いられている白色砂質粘土を指す。ただ、土層が変色していても主体となる土が白色砂質粘土も含めた。また、9(焼土)は土や粘土が被熱を受けて焼土化したもので炭や灰などは混じらないものとした。

・土層注記について

各遺構の土層注記に関しては、下記の数字・記号を組み合わせて用いる。

【土層の主体となる土】

- 1 : 灰褐色土
- 2 : 暗褐色土
- 3 : 黒色土
- 4 : 黑褐色土
- 5 : 褐色土
- 6 : 黄褐色土
- 7 : 淡褐色土(細砂)
- 8 : 暗褐色土と黄褐色土の混土
- 9 : 焼土
- 0 : 粘土

【主体となる土に混入する土】

- A : 暗褐色土
- B : 黒色土
- C : 黄褐色土
- D : 白色砂質粘土
- E : 焼土
- F : 炭化物

【混入する土の粒ブロックの大きさ】

- a : 極大粒(10mm以上)
- b : 大粒(5~10mm程度)
- c : 中粒(2~5mm程度)
- d : 小粒(1~2mm程度)
- e : 微粒(1mm以下)

【混入する土の割合】

- ① : 多量(30~50%)
- ② : 中量(15~30%)
- ③ : 少量(5~15%)
- ④ : 微量(1~5%)

【土層の状況】

- X : 土層上部が硬く縮まっている。
- x : 土層全体が硬く縮まっている。

(表記内容例)

1. 2 C d ④ C e ③ F d ④
暗褐色土で黄褐色土小粒を微量、黄褐色土微粒を少量、炭化物小粒を微量含む。
2. 4 C a ④ C c ④ C d ②
黒褐色土で黄褐色土極大粒を微量、黄褐色土中粒を微量、黄褐色土小粒を中量含む。
3. 3 C d ④ D a ④ F d ③ x
黒色土で黄褐色土小粒を微量、白色砂質粘土極大粒を微量、炭化物小粒を少量含む。土層全体が硬く縮まっている。

竈については下記のアルファベットと数字を用いる。

a : 原位置を保つ用材。

(主に白色砂質粘土。瓦・河原石・シルト質切石などは別記)

b : 移動している天井部などの旧状を推定し得る用材。

(主に白色砂質粘土)

c : 建物貼り床後、竈のため新たに掘削した基盤部分に充填した土。

(暗褐色土ほか)

d : 使用中に堆積した灰や、廃棄後天井部が崩れるまで(bとcの間)に堆積した土で、燃焼部空間を推定し得る部分に存在する土。

(炭化物・灰・暗褐色土ほか)

1. 旧状を復元しがたい用材(白色砂質粘土)。

2. 旧状を復元しがたい用材で、崩壊の際ほかの土が混じったもの。

(白色砂質粘土+暗褐色土ほか)

3. 旧状を復元しがたい用材で、崩壊の際焼土・炭化物が混じったもの。

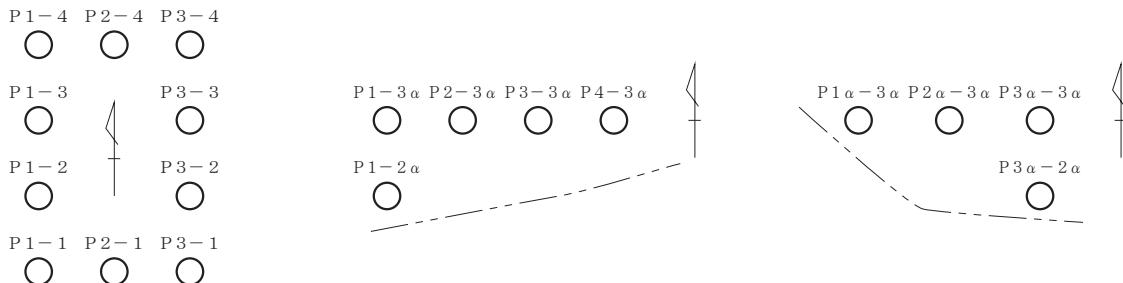
4. 竈廃棄後や、竈崩落過程および崩落後に入り込んだ土。

(暗褐色土・黄褐色土ほか)

7. 遺構

① 遺構の規模等については別表にまとめたので、そちらを参照されたい。

② 挖立柱建物跡の各掘り方(柱穴)の呼び方については下図を参照。

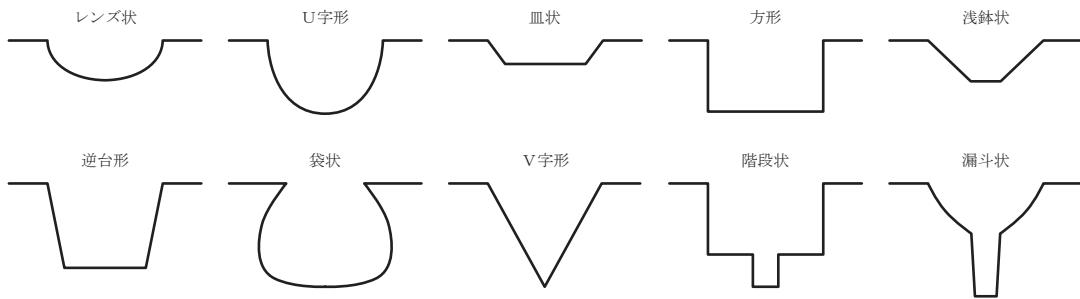


③土坑とその他の遺構の形状について

平面形

- (1) 円 形・・・円形で、長軸と短軸の差が1割以内。
- (2) 類円 形・・・上記相当で、やや歪なもの。
- (3) 楕円 形・・・長軸と短軸の差が1割以上。
- (4) 方 形・・・方形。
- (5) 隅丸方形・・・上記相当で、角が丸いもの。
- (6) 溝 状・・・(3)～(5)の内、細長く延びるもの。
- (7) 不 定 形・・・上記の(1)～(6)にいずれも当てはまらない。

断面形 下図参照



8. 遺構写真について

- ・各写真キャプションに付く(方位)は、撮影した方向を示す。

9. 遺物

①非掲載遺物について

- ・図示しなかった出土遺物(土器)は、第4・5表出土遺物集計表で示した。表の点数は破片数で、接合個体も接合した破片数を数えた。

②遺物観察表について

- ・土器観察表は「番号・図面・図版」「グリッド」「遺構」「器種・器形」「法量：口径・器高・底径」「特徴」「色調・質・胎土」「残量・出土位置」の順。瓦観察表、鉄製品観察表、土製品観察表、石製品・石器観察表は「番号・図面・図版」「グリッド」「遺構」「器種・器形」「特徴」の順で記載した。法量の括弧は推定値・残存値を、瓦・鉄製品・土製品・石製品・石器は現存値と一部最大値を示した。

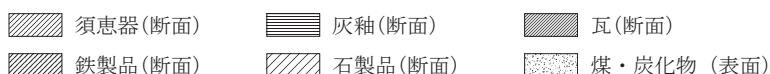
③写真について

- ・遺物写真の縮尺は任意である。

④遺物番号について

- ・土器=1001～、瓦=T001～、鉄製品=M001～、土製品=Y001～、石製品・石器=Q001～

⑤図中のトーン・ラインについて



10. 別表：遺構観察表の見方

- ・P 1：堅穴建物跡や溝などの施設として伴う柱穴。
- ・P 45-：遺構に付属しない単独の小穴。

11. 別表：堅穴建物跡一覧表

a. 建物プラン (一般的な奈良・平安時代の建物)

- ・方形→堅穴部の四方壁が確認された。
- ・方形?→一部が確認され、壁は直線的に延びコーナーを直角に折れる。
- ・?→上面削平され床の痕跡のみが確認された。
- ・凸字形→例外である。

b. 建物規模

- ・()が付く数字は検出面での計測値。そのほかは周溝の心々間の計測値、周溝の無いものは壁下端間の計測値である(図参照)。

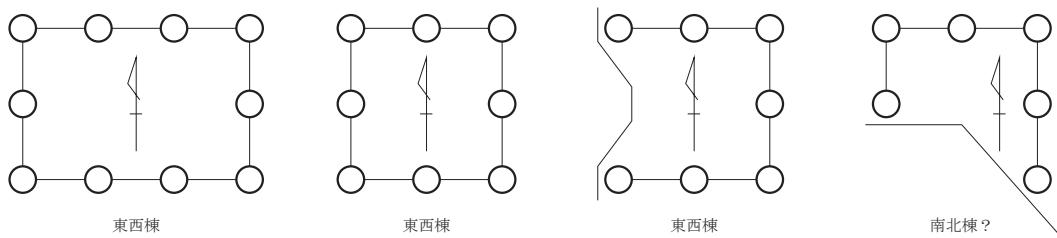


※建築規模 (A)・検出面での計算 (B)

12. 別表：掘立柱建物跡一覧表

a. 方向

- 原則として規模の長い方を棟とした。一般的には柱本数が多い方が棟となる(図参照)。



b. 掘り方プラン・規模

- プランとは各柱穴の上端の形を指し、規模とはそれぞれの柱穴の長軸と短軸の集合データの最大値と最低値である。なお、柱穴の深さは、上端の最も残りのよいところから、柱穴の最も深いところまでの計測値である。

13. 別表：土坑一覧表

a. 形状

- 遺構③参照。

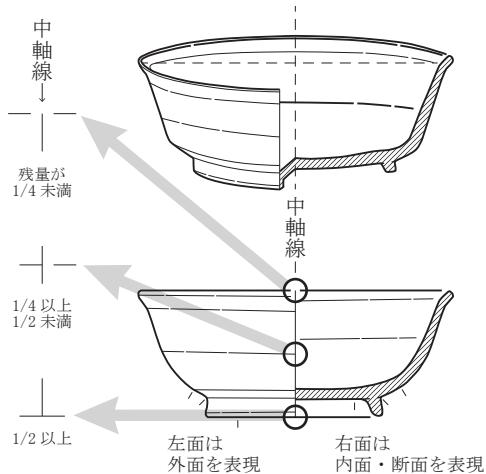
b. 規模

- 計測値は長軸×短軸×深さの順で表示している。
- プランの最大値を“長軸”。それに直交する部分の最大値を“短軸”とする。
また、崩れていない遺構検出面から最深部までの差を“深さ”とする。

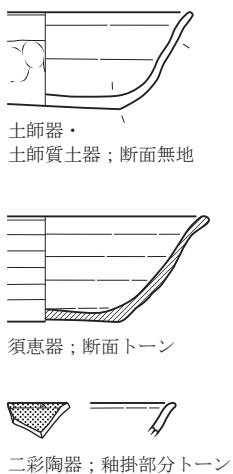
凡例図

土器実測図の表現方法について

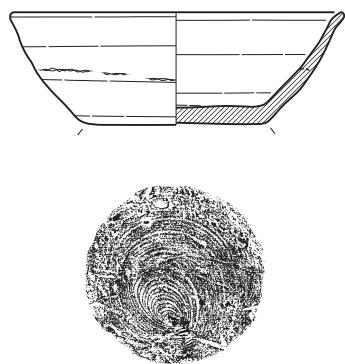
①残存の表現



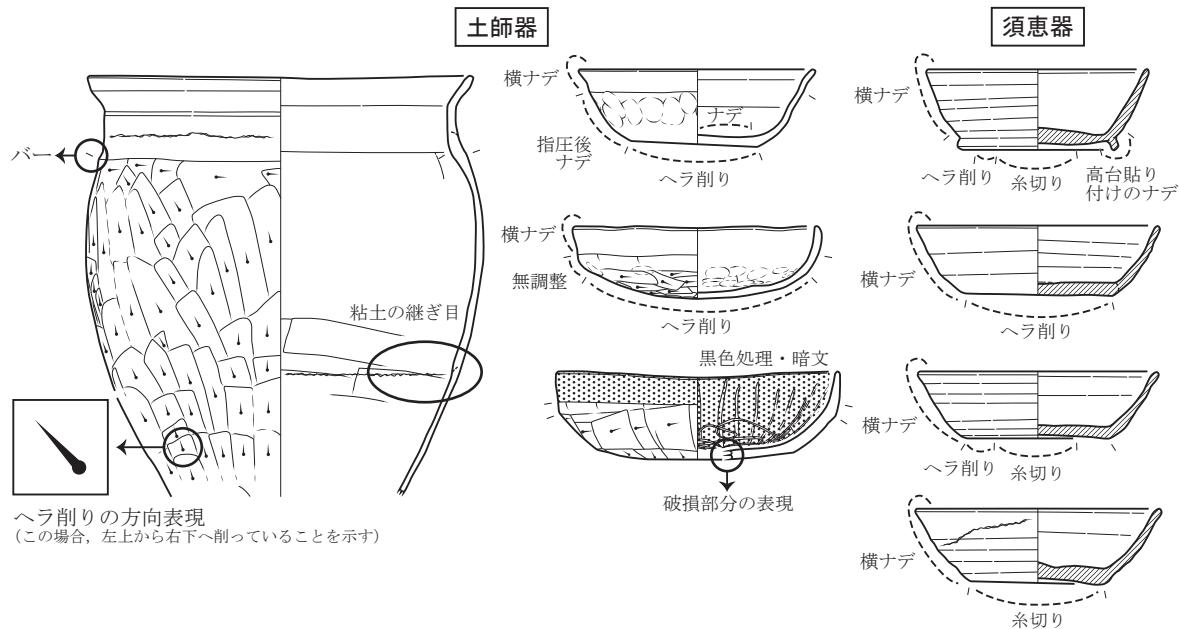
②トーンによる表現



③底部拓影図 (拓本による表現)



④バーを境とする作り方の違いの表現



目 次

例 言／凡 例／凡例図／目 次

第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯 1

第2章 調査の概観

第1節 調査地区の位置 2

第2節 周辺の調査地区 3

第3節 調査の経過 5

第4節 層序 6

第3章 遺構とその出土遺物

第1節 検出された遺構 8

第2節 遺構とその出土遺物

1. 堅穴建物跡 (S I) 8

2. 掘立柱建物跡 (S B) 13

3. 溝 (SD) 13

4. 土坑 (SK) 15

5. その他の遺構と出土遺物 15

第4章 遺構出土遺物の時期とその他の出土遺物について 17

第5章 まとめと考察

第1節 本調査成果 22

第2節 考察 23

引用・参考文献 32

【別表・遺構】 35

【別表・遺物】 39

【図面・遺構】 52

【図面・遺物】 70

【図版・遺構】 97

【図版・遺物】 116

報告書抄録

第1章 発掘調査の経緯

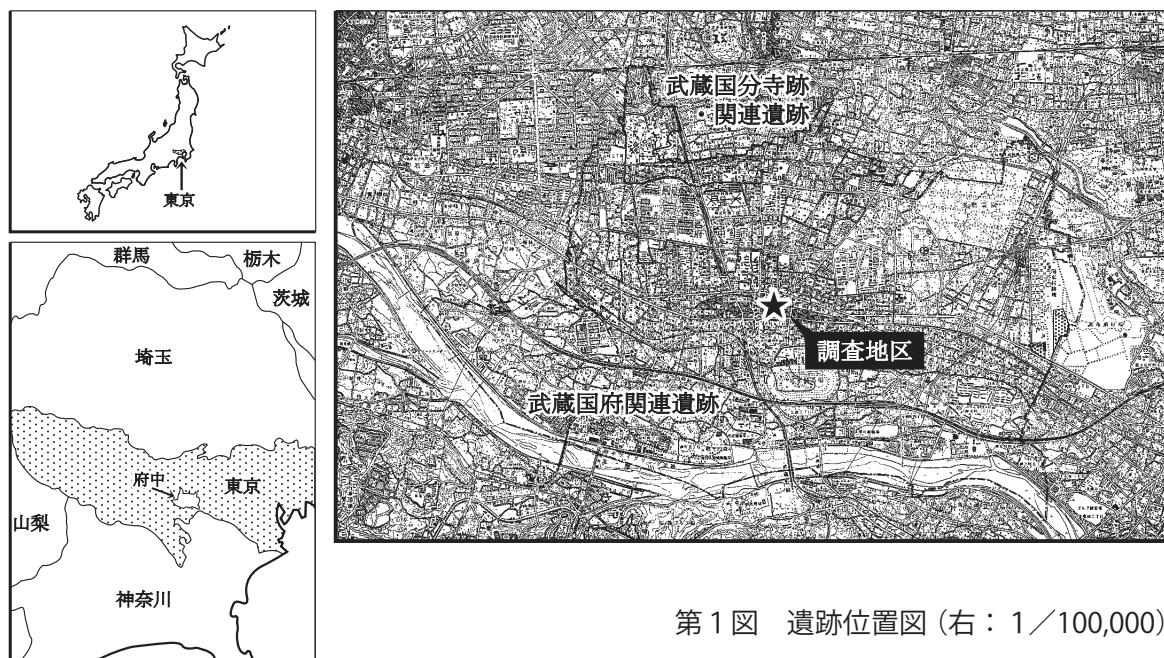
第1節 調査に至る経緯

当該調査地点は、「武藏国府関連遺跡」(府中市No.2)の埋蔵文化財包蔵地に該当している。そのため、集合住宅及び店舗建設設計画に伴い、令和5年12月18日に事業主より、文化財保護法第93条に基づく発掘届が府中市教育委員会(以下「市教委」と表記)へ提出された。これに対して、市教委及び東京都教育委員会(以下「都教委」と表記)は、周辺の発掘調査で、古代の遺構・遺物が発見されていることから、試掘調査が必要であると判断した(都通知ー5教地管理第3893号)。

令和6年1月9日に市教委は試掘調査を実施した。トレーナーを5箇所設定し、古代の遺構・遺物が確認されたため、市教委は事業主に対して、工事着手前に本調査が必要になることを通知した(5府文ふ第1号の335-4)。

本調査にあたっては、事業主より、民間の調査組織である株式会社中野技術(以下、中野技術)に依頼したいとの申し出があり、後日、中野技術より当該発掘調査についての実施計画書が市教委に提出された。当実施計画書をもとに、令和6年1月31日付けで、事業主、市教委、中野技術の三者間による埋蔵文化財発掘調査に関する協定を締結するとともに、中野技術より文化財保護法第92条第1項の規定に基づき埋蔵文化財発掘調査の届出が提出された(都通知ー5教地管理第4270号)。

こうした経緯のもと、令和6年3月5日、中野技術が現地の発掘調査を開始した。



第1図 遺跡位置図(右: 1/100,000)

第2章 調査の概観

第1節 調査地区の位置

府中市は東京都(島嶼部を除く)のほぼ中央に位置する。市域は東西で8.75km,南北で約6.7kmを測り,面積は29.43km²である。西側は国立市・日野市,北側は国分寺市・小金井市,東側は調布市が隣接し,南側は一部多摩川を超えて多摩市・稲城市と接する。

市域の地形は,北側から武藏野段丘面(M面),一段低い立川段丘面(Tc面),多摩川流域の沖積低地によって構成される。市内の約1/2を占める立川段丘面は,西側で標高約70m,東側で標高約40mを測る緩やかに傾斜する平坦面で,比高10~15mの府中崖線(通称ハケと呼ばれる)によって沖積低地と画される。

本調査地区は,京王電鉄京王線府中駅の南東約240mに位置し,府中市宮町一丁目28番20,および28番21,29番2,29番20,29番24,29番25に所在する。

本調査地区の地理的環境は,多摩川中流域左岸,府中崖線上から北方約430mの立川段丘面(Tc面)に位置する。標高は約55.5m~55.2mを測りほぼ平坦である。



地理院タイル(国土地理院)を基に作成

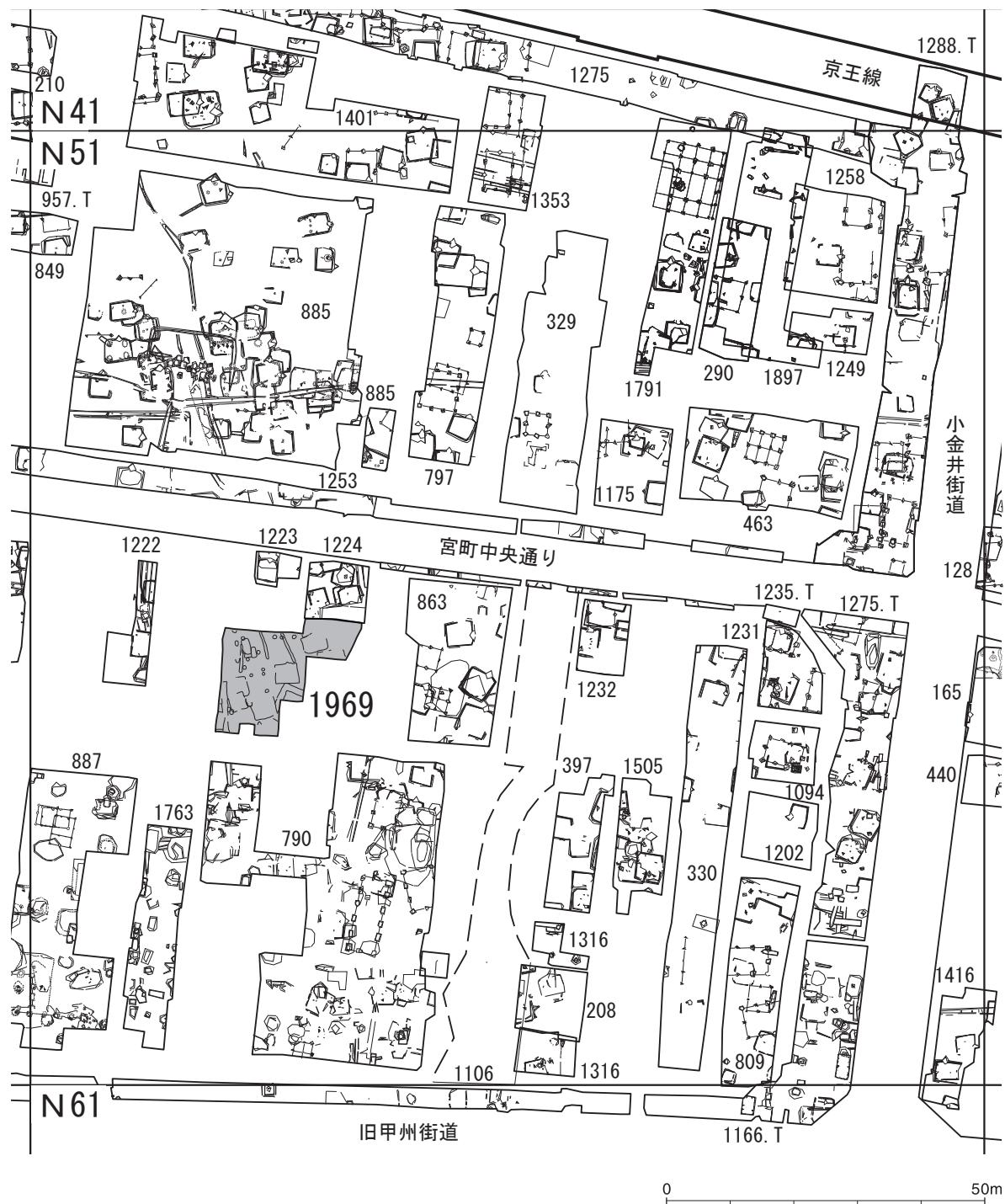
第2図 調査地区位置図 (1/5,000)

第2節 周辺の調査地区

本調査地区が含まれる「武蔵国府関連遺跡」は、立川段丘面から一部多摩川流域の沖積低地にかけて、府中崖線に沿った南北最大1.8kmで、東西6.5kmにわたって帶状に広がる遺跡である。昭和50(1975)年以降の発掘調査による成果から、遺跡の東端から「白糸台地域」、「清水が丘地域」、「国府地域」、「高倉・美好町地域」、「西府・本宿町地域」の5つの地域に分け、検討を加えている。それぞれの地域で武蔵国府関連の集落が展開しているが、地域により様相が異なることも明らかにされている。「国府地域」の中央南寄り、現在の大國魂神社境内とその東寄りに国府の中心とされる国衙推定域が位置しており、推定域を中心に国府のマチ=国府域が広

第1表 近隣の調査地区一覧表

通次数	現場名	グリッド	調査面積	掲載報告書	検出遺構								
					SA	SB	SD	SE	SF	SI	SK	SX	SZ
128	個人住宅	N 51 N 52	61.1	『56年報』	1	2	0	0	0	2	0	0	0
165	紅富士ハイツ	N 51 N 52	144.2	『概報17』	0	2	0	0	2	3	4	0	0
208	個人住宅	N 51	109.7	『概報18』	0	0	2	0	0	5	4	0	0
210	バチンコギヤラリー	M50 M60 N 41 N 51	175	『概報17』	0	1	0	0	0	6	4	0	0
290	マンション松本	N 51	169.2	『概報24』	0	1	0	0	0	6	0	0	0
329	S A N S Q U A R E	N 51	465.8	『概報24』	0	1	1	0	0	4	1	0	0
330	メゾン府中	N 51	501.6	『概報24』	1	0	0	0	0	11	9	3	0
397	マンションえびす	N 51	145.4	『概報28』	0	0	0	0	0	7	2	0	0
440	マスミユーチュアル生命	N 51 N 52	114.3	『概報27』	2	2	0	0	0	3	1	0	0
463	デュオ府中	N 51	372.8	『概報29』	0	2	0	0	0	16	23	1	0
790	府中パークホームズ	N 51	1201.1	『概報35』	0	4	4	4	2	28	18	75	1
797	サンヴェール府中	N 51	396.8	『概報35』	0	3	1	0	0	16	3	1	0
809	マイキヤッスル府中宮町	N 51 N 61	274.3	『概報35』	0	3	0	1	0	3	12	8	1
0837.T	府中パークホームズ	N 51	16.3	『概報35』	0	0	0	0	0	0	1	1	0
849	大黒屋	M60 N 51	186.6	『概報25』	0	3	0	0	0	8	2	0	0
863	ライオンズシティ府中宮町	N 51	345.8	『概報25』	0	2	0	0	0	8	13	6	0
885	ライオンズタワー府中	M60 N 51	1854.2	『概報19』	4	1	6	0	1	54	33	12	32
887	府中宮町セントラルハイツ	M60 N 51	583.8	『概報26』	1	1	0	2	0	0	95	25	2
0957.T	K・Sビル	M60 N 51	200	『武蔵国府関連遺跡調査報告—K・Sビル地区—』	0	1	0	0	0	2	0	4	0
1094	エスピワール オオハラ	N 51	91.6	『概報22』	0	1	0	0	0	2	5	6	0
1117	旧甲州街道拡幅	M60 M70 N 51 N 61	323	『報告34』	2	0	1	1	0	4	12	15	0
1166.T1	都市計画道路3・4・9号線	N 51 N 61	611.8	『東京都埋蔵文化財センター調査報告 第140集』	0	0	4	5	1	18	89	35	0
1175	カーサ藤井	N 51	148.4	『概報34』	1	1	0	0	0	4	2	6	0
1202	菊池ビル	N 51	115.3	『概報38』	0	0	0	0	0	1	0	0	0
1222	個人住宅	N 51	86.4	『概報38』	0	0	3	0	0	4	0	4	0
1223	山本電機ビル	N 51	31	『概報38』	0	0	0	0	0	2	2	1	0
1224	個人住宅	N 51	84	『概報39』	0	0	0	0	0	11	2	3	0
1231	OZAREA 府中 瞳	N 51	112	『概報39』	0	3	0	0	0	4	0	8	0
1232	ラッフィナート府中	N 51	83.6	『概報39』	0	1	0	0	0	5	0	2	0
1235.T	都市計画道路7・5・1号線確認調査	N 51	12.7	『概報39』	0	0	0	0	0	0	0	1	0
1249	スパシエ府中駅前	N 51	74	『概報40』	0	0	0	0	0	5	5	1	0
1253	府中都市計画道路7・5・1号線拡幅工事	M60 N 51	589.5	『報告39』	1	0	5	0	0	25	5	10	1
1258	大東京信用組合府中支店	N 51	232.7	『概報40』	0	3	0	0	0	3	0	3	0
1275	都市計画道路府中7・6・3号新設工事	M50 M41 N 51	942	『報告39』	1	10	1	0	0	19	19	20	1
1275.T	府中都市計画道路3・4・18号線	N 41 N 51	446.9	『東京都埋蔵文化財センター調査報告 第194集』	1	11	3	2	2	38	38	45	0
1288.T	府中都市計画道路3・4・18号線	N 41 N 51	782.6	『東京都埋蔵文化財センター調査報告 第194集』									
1316	LA CONFORT FUCHU	N 51	93.5	『概報39』	0	0	0	2	0	2	0	9	0
1353	SUNSCAPE PREMIERE	N 41 N 51	167.7	『概報39』	0	5	4	0	0	0	0	3	1
1401	デュオ府中駅前	N 41 N 51	805.5	『概報42』	5	3	0	0	0	17	24	11	0
1416	park N	N 51 N 52 N 61	118.8	『概報42』	0	0	2	0	0	5	1	0	0
1595	F U C H U F L A T	N 51	139.6	『概報46』	0	0	0	0	0	4	1	4	0
1763	リルシア府中	N 51	232.3	『概報51』	0	0	0	0	0	0	1	69	1
1791	(仮称)福島恵以子様邸B棟新築工事	N 51	319.8		2	1	1	0	0	12	9	6	0
1897	(仮称)エルシード府中宮町	N 41 N 51	225.8	(仮称)エルシード府中宮町新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	0	0	1	0	0	5	21	0	0



第3図 周辺の調査地区位置図 (1/1,000)

がっている。

本調査地区は、5つの地域のなかの「国府地域」に含まれ、国衙推定域から北東約316mに位置する。所在する府中市宮町一丁目地内は、京王線府中駅前の再開発、及び商業ビルやマンション等の建設に伴う発掘調査が実施されており、堅穴建物跡1,033棟、掘立柱建物跡137棟、柵列43条、溝209条、土坑1194基が調査され、数多くの遺物が出土している(2019年現在、府中市2021)。

本調査地区の周辺では、北側に隣接する1223次調査地区(『概報38』)で堅穴建物跡2棟、土坑2基等が、1224次調査地区(『概報39』)では堅穴建物跡11棟、土坑2基の他、近世の遺構が調査されている。南側に隣接する790次調査地区(『概報35』)からは堅穴建物跡28棟、掘立柱建物跡4棟、道路跡、土坑、溝状遺構が検出され、東北系・北関東系土師器、灰釉陶器の耳皿、鉄製鋤先などが出土したほか、中世の地下式墓、近世以降の井戸跡が調査されている。東側に隣接する863次調査地区(『概報25』)からは、堅穴建物跡8棟、掘立柱建物跡2棟、土坑が検出され、東海系土師器甕が出土しているほか、縄文時代の集石遺構が検出された。

また、1223・1224次調査地区の道路を挟んだ北側の885次調査地区(『概報19』)では、古代の堅穴建物跡54棟、掘立柱建物跡1棟、柵列4条、溝6条、道路跡1条のほか、中世墳墓32基が調査されている。堅穴建物跡は調査地区全体に存在するが、多くは南側に集中している。出土遺物では、放射状と螺旋暗文をもつ盤状坏、内外面に墨書が付く土師質土器耳皿、綠釉陶器碗、銅製鉸具などが出土した。また、調査地区をやや蛇行しながら南北に縦走する溝と西側に併行する道路跡が南北道路跡3に比定されている(府中市2021)。885次調査地区の東に隣接する797次調査地区(『概報35』)では、堅穴建物跡16棟、掘立柱建物跡3棟、溝1条などが調査されている。

本調査地区は、武藏国府関連遺跡内で南北道路跡1を西端とし、東端は八幡町2丁目付近で、南は旧甲州街道沿道、北は京王線以南に囲まれた地域(国衙北側隣接地域)に含まれ、国府域のなかでも堅穴建物跡と掘立柱建物跡が^{ちゅうみつ}稠密に分布する地域であることは本調査地区周辺の調査から伺い知ることができる。

第3節 調査の経過

発掘調査は令和6年3月5日から6月7日まで行った。調査面積は252.1m²である。

本調査では掘削による発生土を開発事業地内に仮置きで処理するため、調査地区を南北2区に分けて調査を行った。調査範囲の区分けは南側を1区、北側を2区として、1区から調査を開始した。本調査地区では、府中市の基本層序Ⅱb～Ⅲ層上面を古代～中世の遺構確認面としたが、一部は表土からの搅乱があり、表土と搅乱土を除去した段階でⅣ～Ⅴ層が現れた部分はこれを遺構確認面として調査を行った。

2月29日に府中市教育委員会(以下、市教委という)と調査範囲の確定を行い、3月1日に測量基準点と基準標高点を設定した。4日には調査地区の周囲に仮囲いを設置し、5日に重機を搬入して1区の表土掘削に着手した。表土掘削の際、市教委の職員が立ち会い、遺構確認面の確定を行った。7日にプレハブと仮設トイレを設置し、11日に調査機材を搬入したあと13

日から遺構検出作業に着手した。15日に遺構検出全景写真を撮影した。なお、遺構検出全景写真撮影前に市教委に遺構検出状況と確定の指導を受けた。18日に検出した遺構の平面形状の測量を行ったあと、遺構の調査を開始した。

4月22日に1区を無人航空機による航空写真撮影を行い遺構の調査をほぼ終了して、市教委から埋め戻しの了承を得た。4月23日より、1区の埋め戻しと残存したSI305の調査と2区の表土掘削を開始した。SI305の調査と並行して2区の遺構確認から調査を開始した。6月3日に2区の遺構の調査をほぼ終了し、無人航空機による航空写真撮影を実施した。6月4日に市教委による完了検査を受けた後、埋め戻しの了承を得て、6月5日から2区の埋め戻しを開始し、6月6日に重機と資材等の搬出をもって現地から撤収した。6月7日に開発事業者に現地の確認と引き渡しをもって調査を終了した。

整理作業は現地調査終了後に出土遺物の洗浄と注記を行うとともに遺構図面や撮影写真の整理作業から開始した。遺構図面はスキャニングし電子平板で作図した図面と整合し第二原図を作成した。遺物は遺構ごとと遺構間の接合作業を行ったあと、令和6年9月18日に府中市ふるさと文化財課職員とともに実測遺物の選別作業を経て遺物実測作業を行った。遺物実測図作成と並行して非掲載遺物の分類と計量を実施した。遺物実測図は担当者が点検してから電子トレースで図版化した。併せて遺構と遺物の別表を作成した。遺構図面は第二原図から整合と修正を施して報告書図面を作成した。報告書本文の執筆と図面類をAdobe社のInDesignで版下を作成し、府中市ふるさと文化財課の校正を経て印刷に着手し、令和7年5月に報告書を刊行した。

第4節 層序

本調査地区の層序は、調査地区北西壁面(N51-12, 24)に基本層序確認坑を設定し、記録したものを第4図に示した。府中市の基本土層に準拠した。また、V層以下に関しては武藏野標準土層との対比を行った。ただ、VI層以下は自然礫が含有されるため、その対比は参考程度として、本調査地区の特徴を記している。

最上層は、砂利や礫とコンクリートやガラスなどを含む近現代の搅乱層である。搅乱層は調査地区全体では標高54.8m～55.5m前後で確認されるが、北西側や北東側では広範囲に深く掘り込まれた搅乱や近現代の遺物を包含する長方形の搅乱も存在し、全体に深く掘り込む搅乱が多数みられ、IIb層やIII層まで搅乱が及んでいる。

IIb層は黒色を呈し、調査地区全域で確認できるが、前述のとおり所によっては搅乱による削平を受けている。ローム小粒を微量に含み、場所によっては焼土中～大粒を多く含む場所も存在する。

III層は黒褐色でIIb層よりもローム小粒がやや多く含まれ締まりがある。

IV層は暗褐色を呈しロームブロックを含む。武藏野標準土層のIIb層に相当する。IV層は暗褐色を呈し、ロームブロックを含むなどローム層との漸移層と思われる。

本調査では、III層における遺構確認を目指したが、不明瞭な遺構はIV層上部を確認面とした。

V層は黄褐色軟質ローム層で、スコリアをやや多く含み下面は不連続面を呈する。武藏野標

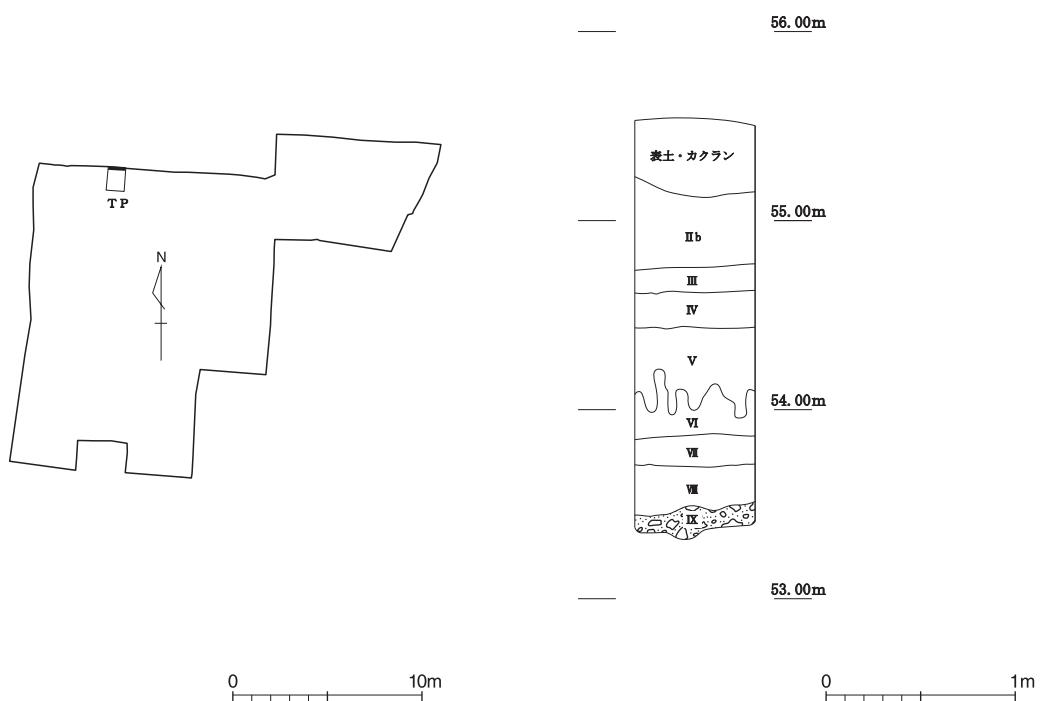
準土層の立川ロームIII層（ソフトローム）に相当する。

VI層は黄褐色硬質ローム層で、武蔵野標準土層の立川ロームIV層（ハードローム）に相当するが小礫を若干含む。

VII層は黄褐色硬質ローム層だが、VI層やVIII層よりもやや暗色を呈し、小礫を少量含んでいる。武蔵野標準土層の立川ロームV層（第I 黒色帶）に相当する。

VIII層は黄褐色硬質ロームで、小から中型の礫を多く含む。武蔵野標準土層の立川ロームVI層に相当すると思われる。

IX層は青灰色砂質土に小から拳大の礫を多量に含んだ礫層と思われる。IX層は標高53.50mで確認された。



第4図 基本層序確認坑位置（左：1/400）と土層断面（右：1/40）

第3章 遺構とその出土遺物

第1節 検出された遺構

本調査地区は府中市域の中グリッドN 51地区に位置し、N 51地区では45番目の調査である。府中市における発掘調査の通次数では1969次にあたる。本調査地区では、古代の遺構が検出された。遺物は検出した遺構により多寡があった。個別遺構の年代比定については遺構の切り合ひ関係、出土遺物などを勘案した。遺構の種別ごとの数と名称は以下のとおりである。なお、図示した遺物以外の出土遺物は別表に点数と重量をまとめた（第4・5表）。

竪穴建物跡	9棟（N 51 - S I 184, S I 301 ~ 308）
掘立柱建物跡	2棟（N 51 - S B 42 ~ 43）
溝	4条（N 51 - S D 38 ~ 41）
土坑	2基（N 51 - S K 325 ~ 326）

第2節 遺構とその出土遺物

1. 竪穴建物跡（S I）

N 51 - S I 184 (別表 1 - 1・5 - 1, 図面 2・19, 図版 1・20)

遺構 N 51 (15, 24・25) グリッドに位置する。北側は調査地区外に延び、東側は搅乱に、南周辺部を S I 306 に切られる。規模や形状は不明。壁は南周辺部を S I 306 に切られるか重複するため残存せず、西の調査地区壁断面では確認面から 26 cm を測り、やや斜めに立ち上がる。底面は貼り床で一部硬化が認められた。覆土は大粒～小粒のローム粒、小粒の焼土粒を含む黒褐色土を主体とする。周溝やピット、竈は確認出来なかった。掘り方は南周辺部がやや深く掘り込まれている。

遺物 部分的な検出のため遺物量は少ない。個別番号を付けて取り上げた遺物は7点である。図示したのは土師器壺1点(1001)、甕1点(1002)、須恵器皿2点(1003・1004)である。1001は北武藏型壺で覆土下層から、1003は東金子窯跡群で覆土中層から出土した。

N 51 - S I 301 (別表 1 - 1・5 - 1・5 - 2・6 - 1・7 - 1・9 - 1, 図面 3・4・19 ~ 22, 図版 2・3・20 ~ 22)

遺構 N 51 (11・12, 20・21) グリッドに位置する。北周辺部が S I 302 を、南周辺部が P 106, P 107, P 108 を切る。北西隅と南周辺中央部を搅乱に切られる。ほぼ方形の建物で、確認面での規模は南北 2.7 m × 東西 2.65 m を測り、主軸方向は N - 67° - E である。壁の高さは最大 34 cm を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は全面貼り床で中央部が硬化している。周溝は南壁を除いて全周し、幅 7 ~ 13 cm, 深さ 7 ~ 15 cm を測る。覆土は極大粒～小粒のローム粒を含む黒褐色土を主体とする。掘り方は全体的に浅く掘り込む。ピットは床下の掘り方から 1 個確認した。ピット覆土の最上層に丸瓦 (T 001) が埋められていた。

竈は東壁中央に設けられる。天井部と奥壁を搅乱で壊されている。袖は白色砂質粘土と黒褐色土で作られる。燃焼部と思われるところには焼土が多く含まれる黒褐色土が堆積する。袖部は竪穴内に13～14cm張り出し、両袖間の幅は32cmを測る。火床面は明確ではないが床面より僅かに窪んでいる。奥壁は搅乱により消失しているため、煙道や壁面からの掘り込みは不明である。

遺物 出土遺物量は比較的多く竈周辺からの出土が多い。個別番号を付して取り上げたのは床上で135点、竈16点、掘り方11点である。図示したのは土師質土器壊2点(1005・1006)、土師器甕2点(1007・1008)、須恵器壊3点(1009～1011)、皿1点(1012)、塊1点(1013)、高台塊1点(1014)、鉢1点(1015)、灰釉陶器長頸瓶1点(1016)、丸瓦3点(T001～T003)、平瓦2点(T004・T005)、砥石2点(Q001・Q002)、鉄製品釘1点(M001)である。1005と1009は竈右袖付近の床上に入れ子状態で、1012は南東隅部の壁に張り付く形で、1014は床上に逆位で出土した。T001は掘り方で検出したピットの上面から出土した。覆土上層から出土したT002はSK325の破片と接合した。1005と須恵器壊・塊・皿の底部は回転糸切り無調整である。

N 51-S I 302 (別表1-1・5-2, 図面5・23, 図版2・4・23)

遺構 N 51(11・12, 21・22) グリッドに位置する。南周辺部をS I 301に、西周辺部を搅乱に切られる。方形?と思われる建物跡である。確認面の規模は南北3.10m×東西(2.18)mを測り、主軸方向N-11°-Wである。壁の高さは最大36cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は全面貼り床で中央部が硬化している。周溝は東壁と南壁にあり幅9～14cm、深さ4～8cmを測る。ピットは1個確認したが浅いため柱穴ではない。覆土は、遺構の中央部の中粒～小粒のローム粒と小粒の焼土を含む黒褐色土と、壁際の中粒～小粒のローム粒と中粒の焼土粒を含む暗褐色土に分けられる。掘り方は南東隅をやや深く掘り込む。竈は北壁中央で搅乱により消失している。

遺物 出土遺物は搅乱などにより少ない。個別番号を付して取り上げた遺物は16点である。図示したのは土師器壊1点(1017)、甕4点(1018～1021)である。1017は北武藏型で床上から出土した。1018～1020は長甕の口縁部と底部、1021は相模型甕の底部でいずれも覆土から出土した。

N 51-S I 303 (別表1-2・5-2, 図面6・23, 図版5・23)

遺構 N 51(12・13, 19・20) グリッドに位置する。西側と南側が調査地区外に延びる。東側は搅乱や表土が厚く堆積しているため、明確な壁は検出できなかった。方形?と思われる建物跡である。規模は南北(1.48)以上m×東西(2.35)以上mを測り、主軸方向はN-6°-Wである。壁の高さは最大35cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、一部に硬化面が認められた。周溝やピットは確認できなかった。覆土は小粒～極小粒のローム粒と極小粒の焼土を含む黒色土を主体とするが、上面の覆土は削平されたと思われる。掘り方はほぼ平坦に浅く掘り込む。

竈は北壁中央に位置する。両袖は白色砂質粘土で構築される。天井部は崩落したと考えられ、

白色砂質粘土に焼土を含む。内部から土師器甕の破片が出土した。袖部は竪穴内に26～28cm張り出し、両袖間は36cmを測る。火床は床面より3cmほど低い。煙道は不明だが、奥壁は84°で立ち上がり、途中オーバーハングして掘り込まれている。

遺物 遺物の出土量は少ない。個別番号を付して取り上げた遺物は床上で21点、竈16点、掘り方4点である。図示したのは土師器坏1点(1022)、土師質土器坏1点(1023)、土師器甕1点(1024)、須恵器坏1点(1025)である。土師質土器坏、土師器甕、須恵器坏が竈から出土した。1022は底部を持ちヘラケズリ、1023は回転ヘラケズリで底部を整形する。1024は武藏型でコの字状口縁。1025の底部は回転糸切り無調整である。

N 51-S 1 304 (別表1-2・5-3・6-1・7-1・8-1・9-1, 図面7・24～26, 図版6・7・23・24)

遺構 N 51(12・13, 20・21) グリッドに位置する。SB 42を切り、北西隅部をP 45-107に切られ、北側を搅乱に切られる。方形の建物である。確認面の規模は南北(3.00)以上m×東西3.60mを測り、主軸方向はN-13°-Wである。壁の高さは最大で36cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は全面貼り床で中央部が硬化している。周溝やピットは確認できなかった。覆土は極小粒～小粒のローム粒と極小粒～小粒の焼土粒を含む黒褐色土を主体とする。掘り方は周囲を深く掘り込み中央が浅い。竈やピットなどは確認できなかった。

遺物 上層から下層にかけて出土している。個別番号を付して取り上げた遺物は床上で117点、掘り方35点である。図示したのは土師器坏1点(1026)、甕1点(1028)、土師質土器坏1点(1027)、須恵器坏5点(1029～1033)、瓶1点(1034)、甕1点(1035)、灰釉陶器塊1点(1036)、丸瓦1点(T 006)、平瓦1点(T 007)、砥石1点(Q 003)、石皿1点(Q 004)、鉄製品2点(M 002・M 003)、土製品1点(Y 001)である。南武藏型の1026と1027、M 003は掘り方から、1032は床上から出土した。それ以外は覆土出土である。須恵器坏は全て底部回転糸切り無調整で、1031は内面に煤が固形化したものが付着し、1033は外面に「廿」の墨書がある。1035は胎土に銀雲母を多く含むことから新治窯跡群の製品である。1036は猿投窯跡群で黒笛14号窯式期である。Q 004は縄文時代の遺物ではなく古代と考えた。M 002は環状鉄製品で、Y 001は白色砂質粘土が塊状に固形化した土製品であり、いずれも用途不明である。

N 51-S 1 305 (別表1-2・5-3・5-4・6-1・8-1・9-1, 図面8・27～29, 図版8・25)

遺構 N 51(10・11, 19・20) グリッドに位置する。西側が調査地区外に延びる。東周辺部はSD 38と搅乱により壊されている。方形?の建物と思われる。確認面の規模は南北2.80m×東西(1.10)以上mを測り、主軸方向はN-93.5°-Eである。壁の高さは最大20cmを測り、やや斜めに立ち上がる。床面は貼り床で西側が硬化している。周溝やピットは確認できなかった。覆土は小粒のローム粒と小粒の焼土粒、中粒の炭化物粒を含む黒褐色土を主体とする。掘り方は北周辺部と南周辺部を深く掘り込み中央が浅い。

竈は東壁の中央に位置する。天井部と奥壁を搅乱で壊されている。袖は、左袖が白色砂質粘土であるが、右袖は焼土と黒褐色土を主体として構築されている。また、左袖に平瓦1点が白

色砂質粘土内に埋められていた。竈内は廃棄後に埋没した土が堆積しており、燃焼部などは不明である。袖部は、竈穴内に44～70cm張り出し、両袖間は37cmを測る。火床面は不明確だが床面より3cm低いと思われる。奥壁が搅乱で壊されているため、壁掘り込みや煙道は不明である。

遺物 西側が調査地区外に延びるため遺物量はやや少ないが、床上や竈付近から遺物が出土した。個別番号を付して取り上げた遺物は床上で18点、竈16点である。図示したのは土師質土器坏3点(1037～1039)、須恵器坏(1040)、丸瓦4点(T008～T011)、平瓦4点(T012～T015)、磨石1点(Q005)、須恵器坏の底部を再利用した円形土製品(Y002)が出土した。1037が掘り方と覆土から、1038が竈と覆土から、1039が床上から出土した。1040は掘り方から出土した。T009は竈出土の破片とN51(11, 19)の搅乱から出土した破片が接合している。T015は竈の左袖内上部から出土した。

N51-SI306 (別表1-3・5-4～5-6・6-1・7-1・9-1, 図面9・10・29～33, 図版9・10・26～28)

遺構 N51(15・16, 23・24) グリッドに位置する。SI184を切り、北東隅部から東周辺中央部を搅乱に切られる。西周辺部に試掘トレンチが掘り方付近まで掘り込まれていた。南北が短く東西が長い長方形の建物で、確認面の規模は南北2.95m×東西3.85mを測り、主軸方向はN-23°-Wである。壁の高さは最大24cmを測り、やや斜めに立ち上がる。床面は貼り床で中央部が硬化している。覆土は中粒～小粒のローム粒と中粒～小粒の焼土粒を含む黒褐色土が上層にあり、中粒～小粒のローム粒と中粒～小粒の焼土粒に極大粒～小粒の白色砂質粘土を含む黒褐色土を中層として、小粒のローム粒を含む黒色土を下層となる3層に区分される。周溝は確認できなかった。掘り方は周囲を深く掘り込み竈前面が浅い。ピットは竈の西側に1個検出した。掘り方は浅く断面は皿状を呈する。覆土は焼土や炭化物と白色砂質粘土を多く含む黒褐色土を主体とし、底面には須恵器坏(1059)が逆位で埋められ、底面はやや被熱を受けていた。

竈は北壁中央に位置する。東側と奥壁が搅乱で壊され、竈も旧状を復元しがたい白色砂質粘土と黒褐色土や焼土が多く、袖や天井部、及び燃焼部を特定することができなかった。さらに、奥壁が搅乱されていることから煙道や壁からの掘り込みも不明である。

遺物 搅乱で削平されているところもあるが、覆土上層から下層まで多くの遺物が出土した。個別番号を付して取り上げた遺物は床上で176点、竈5点、ピットから5点である。図示したのは、土師器坏3点(1041～1043)、土師質土器坏3点(1044～1046)、土師器台付甕1点(1047)、甕1点(1048)、甕5点(1049～1053)、須恵器坏6点(1054～1059)、皿1点(1060)、塊2点(1061・1062)、蓋3点(1063～1065)、甕4点(1066～1069)、灰釉陶器皿1点(1070)、丸瓦4点(T016～T019)、平瓦4点(T020～T023)、砥石2点(Q006・Q007)、鉄製品2点(M004・M005)である。1041は北武藏型で覆土から、1042は南武藏型で覆土下層から出土した。1045は底部にヘラ記号があり、竈と覆土の破片が接合した。1046は内面を黒色化した黒色土器で覆土から出土した。1047は床上からの出土である。1049・1050は武藏型でコの字口縁、1052は平行叩き、1053は刷毛調整でいずれも覆土から出土した。須恵器坏はいずれも底部回転糸切り無調整で1054が床上、1059はピット内から出土した。1061と1064、1067は床上から、

1070は覆土中層から出土した。1069は覆土からで産地不明。1070は覆土中層からで二川窯跡群の黒窓14号窓式。覆土中層から出土したT020は「入」のヘラ描きがあり、Q006には細い線刻で文字らしきものが刻まれている。

N 51 – S I 307 (別表 1 – 3 · 5 – 6 · 5 – 7, 図面 11 ~ 13 · 34 ~ 36, 図版 11 · 12 · 28 ~ 30)

遺構 N 51 (13 ~ 15, 22 · 23) グリッドに位置する。南周辺中央部を S B 42 に切られ、西側の一部を搅乱に切られる。方形の建物だが南壁が 20 cm ほど長く、やや台形を呈する。確認面の規模は南北 3.00 m × 東西 3.60 m を測り、主軸方向は N – 4° – W である。壁の高さは最大 50 cm を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は貼り床で竈前面から中央部が硬化している。覆土は、小粒のローム粒と小粒の焼土粒、小粒の炭化物粒を含む黒褐色土を上層とし、下層は黒色土と黒褐色土に細かく区分された。周溝は北東隅部以外で全周し、幅 11 ~ 14 cm、深さ 6 ~ 10 cm を測る。ピットは確認されなかった。掘り方は南東隅と南西隅を深く掘り込み北側は浅い。

竈は北壁中央東寄りに位置する。両袖は白色砂質粘土で構築され、右袖の先端付近に土師器甌の 1/2 残存個体が逆位で埋められていた。天井部を構築していた用材は崩落して内部に堆積している。袖部は竈穴内に 40 ~ 42 cm 張り出し、両袖間は 38 cm を測る。火床面は床面とほぼ同じ高さで確認され、厚さ 5 cm の焼土層が堆積していた。煙道部は竈穴外に掘り込まれ、壁面からの掘り込みは 30 cm を測り、奥壁は 60° で斜めに立ち上がる。

遺物 覆土下層や床上から出土した遺物が多い。個別番号を付して取り上げた遺物は床上で 38 点、竈 4 点である。図示したのは土師器甌 13 点 (1071 ~ 1073, 1075 ~ 1084)、塊 1 点 (1074)、甌 2 点 (1085 · 1086)、甌 5 点 (1087 ~ 1091)、須恵器甌 1 点 (1092) である。1071 は模倣甌、1072 は北武藏型甌、1073 は続比企型甌、1074 は在地系である。1076 ~ 1079 は南武藏型甌の範疇に含まれるもので全て内面に暗文が施される。1076 が竈周辺部、1077 が北東隅部の床上から出土した。1080 ~ 1084 は盤状甌で 1084 は内面に暗文が施される。1080 は竈に近い北東隅部の床上から逆位で出土した。1085 は竈右袖の粘土先端から出土した袖構築材で、床上と竈から出土した 1086 が同一個体と考えられる。1087 は竈周辺部左右の覆土下層から出土した破片が接合した球胴の口唇部を突出させる小型甌である。1092 は湖西窯跡群の製品である。

N 51 – S I 308 (別表 1 – 3 · 5 – 7 · 5 – 8 · 6 – 2, 図面 13 · 37, 図版 13 · 31)

遺構 N 51 (16 · 17, 23) グリッドに位置する。南側が調査地区外に延びる。北側の 1/3 ほどを搅乱で壊されている。方形?の建物である。確認面の規模は南北 (1.16) 以上 m × 東西 4.20 m を測り、主軸方向は N – 6° – W である。壁の高さは最大 18 cm を測り、やや斜めに立ち上がる。床面は搅乱が多いが貼り床で、断面に硬化面が確認できた。覆土は小粒～中粒のローム粒、中粒の焼土粒、中粒の炭化物粒と大粒の白色砂質粘土を含む黒褐色土を主体とする。周溝やピット、竈は確認できなかった。掘り方は壁際を溝状に掘り込み中央が浅い。

遺物 南側の大部分が調査地区外に延び、搅乱に削平されている箇所も多いため全体に遺物量は多くない。個別番号を付して取り上げた遺物は 10 点である。図示したのは土師器甌 1 点 (1093)、土師質土器高台塊 1 点 (1094)、須恵器甌 2 点 (1095 · 1096)、高台塊 1 点 (1097)、灰釉陶器皿 1 点 (1098)、平瓦 1 点 (T 024)、埠 1 点 (T 025) である。ただ、1094 と T 024 は北側

の搅乱から出土したため本遺構の遺物でない可能性がある。1093は床上から出土し内面に細かな暗文と磨きがあり赤彩される。1095, 1096は床上から出土した。底部は回転糸切り無調整で底部にヘラ記号がある。1097は覆土から出土しており器形的に流れ込みの可能性がある。1098は覆土下層から出土した灰釉陶器の無釉皿で二川窯跡群の折戸53号窯式期である。T025は覆土下層から出土した。

2. 掘立柱建物跡 (SB)

N 51 – SB 42 (別表 2 – 1 • 5 – 8, 図面 14 • 15 • 38, 図版 14 ~ 16 • 31)

遺構 N 51(13 ~ 15, 20 ~ 22) グリッドに位置する。桁行 3 間 (5.10 m) × 梁行 2 間 (2.80 m) 以上を測る。東側は調査地区外に延びる。柱穴間を溝で繋げる溝もち掘立柱建物跡で、建物方位は桁行を南北に置くとして N – 25° – E である。P 1 – 1 の東側上面は搅乱で壊されている。南西の P 1 – 1 から P 1 – 2 を S I 304 に切られ、北西隅 P 1 – 4 が S I 307 を切る。確認面での掘り方の規模は南北 75 ~ 82 cm, 東西 62 ~ 84 cm, 深さ 84 ~ 95 cm を測る。掘り方の平面形はほぼ方形である。柱アタリは全ての柱穴で確認し、径 14 ~ 18 cm である。覆土は小粒~中粒のローム粒を含む黒褐色土と暗褐色土を主体とし、極大粒のロームを多量に含む黄褐色土を挟む版築により埋められていた。柱痕は全て黒褐色土である。柱抜き取りと思われる痕跡は P 1 – 3 で確認された。布掘り溝は確認面で上幅 85 ~ 102 cm, 下幅 54 ~ 72 cm, 深さ 38 ~ 50 cm を測り、断面形は上幅がやや広い逆台形である。覆土は上層を小粒~大粒のローム粒子を含む黒褐色土、中層を小粒のローム粒子を含む黒色土に分けられ、最下層は黒褐色土のブロックを含む黄褐色土が堆積する。

遺物 溝と柱穴を含めても出土遺物は少なく、個別番号を付して取り上げた遺物は 4 点である。図示したのは土師器壺 1 点 (1099), 須恵器壺 1 点 (1100), 甕 1 点 (1101) である。図示した遺物は全て布掘り覆土上層から出土した。1099 は盤状壺, 1100 は底部を回転ヘラケズリ調整する。1101 は産地不明の甕で S I 304 の覆土中層出土遺物と接合した。

N 51 – SB 43 (別表 2 – 1 • 5 – 8, 図面 16 • 38, 図版 17 • 31)

遺構 N 51 (14, 24) グリッドに位置する。梁行 1 間 (1.85 m) 以上、桁行不明。北側は調査地区外に延びる可能性がある。西側は柱穴を確認できず、東側に延びるかは不明で、建物方位も不明である。P 1 – 1 α が SD 41 に切られる。確認面の掘り方の規模は長軸 54 ~ 66 cm, 短軸 47 ~ 55 cm, 深さ 80 ~ 86 cm を測る。柱アタリは 2 本とも確認でき、P 1 – 1 α は柱底より 20 cm 上部で確認された。覆土はローム小粒を含む黒褐色土を主体とし、柱痕も黒褐色土である。

遺物 柱穴内から出土した遺物は土師器甕 2 点で図示したのは土師器甕 1 点 (1102) である。1102 は長甕の底部で P 2 – 1 α の下層から出土した。底部に木葉痕をもち、外面はヘラケズリ、内面は丁寧なナデを施す。

3. 溝 (SD)

N 51 – SD 38 (別表 3 – 1 • 5 – 8, 図面 17 • 38, 図版 17 • 31)

遺構 N 51 (11, 19 ~ 22) グリッドに位置する。北側上部は搅乱され、南側も搅乱に切られ

る。S I 305を切る。南側は調査地区外に延び、北端は西側へ直角に折れて調査地区外に延びる。主軸方向はN-2.5°-Wでやや西偏しながら南北方向に走る。規模は、長さ7.7m以上、幅85～100cm、確認面からの深さ18～63cmを測る。断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦で、南から北に向かって若干の傾斜がある。覆土はローム小粒～中粒と焼土小粒を含む暗褐色土を主体とし、下層に行くほど褐色土に近くなる。

本遺構は検出した位置とその規模から、南に隣接する調査地点(790次)で確認されたSD4の北側部分の可能性がある。

遺物 出土した遺物は少なく、個別番号を付して取り上げた遺物は6点である。図示したのは土師器壺1点(1103)、須恵器壺1点(1104)である。1103は南武藏型壺で覆土下層、1104は底部回転糸切り無調整で覆土中層から出土した。

N 51-SD 39 (別表3-1, 図面17, 図版18)

遺構 N 51(11・12, 22～24) グリッドに位置する。北端はSK325を切り、中央西側を掻乱に切られる。主軸方向はN-3°-Eでやや東偏して南北方向に走り、南北端は丸く窄まり終端する。規模は、長さ4.44m, 39～45cm、確認面からの深さ8～17cmを測る。断面形はU字形で、覆土はローム小粒を含む黒色土を主体としている。底面はほぼ平坦で傾斜はない。

遺物 遺物は出土しなかった。

N 51-SD 40 (別表3-1・6-2, 図面17・38, 図版18・32)

遺構 N 51(13, 23・24) グリッドに位置する。北側は調査地区外に延びる。主軸方向はN-16°-Wで西偏して南北方向に走り、南端は丸く窄まり終端する。規模は、長さ4.5m以上、幅33～44cm、確認面からの深さ6～15cmを測る。断面形は凸レンズ状で、覆土はローム小粒を含む黒褐色土を主体とする。底面はほぼ平坦で傾斜はない。

遺物 遺物の出土は少なく、個別番号を付して取り上げた遺物は7点である。図示したのは、覆土下層から出土した平瓦1点(T 026)である。

N 51-SD 41 (別表3-1・5-8, 図面17・38・39, 図版18・32)

遺構 N 51(14, 23・24) グリッドに位置する。北側が調査地区外に延びる可能性がある。SB43 P 1-1 α を切る。主軸方向はN-23°-Wで西偏して南北方向に走り、南端は丸く窄まり終端する。規模は、長さ5.1m(以上)、幅34～42cm、確認面からの深さ6～27cmを測る。断面形はU字形で、覆土はローム小粒を含む黒色土を主体とする。底面は平坦だが、北から南に向かって緩やかに傾斜しながら掘り込まれている。SD40とほぼ平行に走行しており、両遺構の芯心間は3.2mを測る。

遺物 個別番号を付して取り上げた遺物は4点である。図示したのは土師器壺2点(1105・1106)と甕1点(1107)である。1105は覆土上層から出土し内面に暗文を施す。1106はナデとヘラケズリ調整される壺で覆土下層から出土した。1107は長甕の口縁部で覆土出土である。

4. 土坑 (SK)

N 51 – SK 325 (別表 4-1・5-8・5-9・6-2, 図面 18・39・40, 図版 19・32・33)

遺構 N 51 (12, 23・24) グリッドに位置する。SD 39 に切られ, SK 326 とピットを切る。平面形は楕円形で, 断面形はU字形を呈する。主軸方向は長軸で N-14.5°-W でやや西偏する。規模は, 長軸 3.0 m × 短軸 1.28 m, 確認面からの深さ 82 ~ 89 cm を測る。遺構の底面には小さな凹凸が顕著に残されている。覆土は上層が黒褐色土で, 中層が黒色土, 下層は黒褐色土を主体とし全体にローム小粒～中粒が含まれ, 自然堆積ではなく人為的に埋められたと考えられる。南側に南北 0.7 m × 東西 1.1 m, 確認面からの深さ 30 ~ 32 cm のテラスを持つが別遺構の可能性もある。

遺物 遺物は覆土の上層から下層にかけて出土した。個別番号を付して取り上げた遺物は 25 点である。図示したのは土師器壺 2 点 (1108・1109), 台付甕 1 点 (1110), 甕 1 点 (1111), 須恵器壺 7 点 (1112 ~ 1118), 高台皿 1 点 (1119), 灰釉陶器塊 1 点 (1120), 丸瓦 1 点 (T 027), 平瓦 1 点 (T 028) である。1108 は覆土下層出土の盤状壺で内面に螺旋暗文が施される。1109 は覆土出土の南武藏型, 1110 は武藏型台付甕脚部で, 1111 の長甕口縁部とともに覆土上層出土である。須恵器壺は 1112 が底部に回転ヘラケズリ調整を施しているほかは回転糸切り無調整で, 1113 が覆土下層出土以外は覆土上層からの出土である。1119 の高台皿も覆土上層から出土した。1120 は覆土下層から出土した灰釉陶器塊で猿投窯跡群の黒釜 14 号窯式期後半に相当する。丸瓦と平瓦は覆土上層から出土した。

N 51 – SK 326 (別表 4-1・5-9, 図面 18・40, 図版 19・33)

遺構 N 51 (12, 23) グリッドに位置する。西側を SK 325 に切られる。平面形は隅丸長方形で, 断面形は皿状を呈する。主軸方向は長軸で N-7.5°-W でほぼ南北方向を向く。規模は, 南北 1.65 m × 東西 0.77 m, 確認面からの深さ 40 ~ 45 cm を測る。底面はほぼ平坦である。覆土はローム小粒を含む黒褐色土を主体とし, 最下層は暗褐色土が堆積する。

遺物 遺物の出土は少なく, 個別番号を付して取り上げた遺物は 6 点である。図示したのは覆土上層から出土した須恵器高台壺 1 点 (1121) である。

5. その他の遺構と出土遺物

(1) ピット (別表 5-9・5-10・6-2・9-1, 図面 40・41, 図版 33・34)

本調査地区から遺構に伴わない 24 基のピットを検出した。遺物が出土したピットは 13 基でいずれも覆土からの出土である。図示したのは, P 45-103 の土師質土器壺 1 点 (1122), P 45-104 の須恵器長頸壺 1 点 (1123), 灰釉陶器皿 1 点 (1124), P 45-108 の平瓦 1 点 (T 029), P 45-119 の須恵器壺 1 点 (1125), P 45-120 の砥石 1 点 (Q 008), P 45-122 の土師質土器壺 1 点 (1126), 土師質土器塊 1 点 (1127), 灰釉陶器塊 1 点 (1128) である。1124 は二川窯跡群で百代寺窯式期, 1125 は底部回転糸切り無調整, 1127 は内面を黒色処理する, 1128 は猿投窯跡群で黒釜 90 号窯式期である。

(2) 遺構外出土遺物 (別表 5-10・6-2・9-1, 図面41~45, 図版34~36)

遺構外から出土した遺物のうち, N 51(12, 22) と N 51(12, 23) の第Ⅱb~Ⅲ層から出土した土師器甕1点(1130), 須恵器坏1点(1129), 丸瓦2点(T 030・T 031), 平瓦1点(T 032)を図示した。1130の土師器甕は外面に格子叩き, 1129は底部回転糸切り無調整である。

調査地区全体から採集した古代の遺物からは, 須恵器坏1点(1131), 灰釉陶器皿2点(1132, 1133)と丸瓦5点(T 033~T 037), 平瓦2点(T 038・T 039)を図示した。1131は底部を全面回転ヘラケズリ調整する。1132は二川窯跡群の端反皿で黒窯90号窯式期~折戸53号窯式期, 1133は猿投窯跡群で黒窯90号窯式期である。

調査地区内に掘られた搅乱から出土した古代の遺物で図示したものは, N 51(12, 21)の搅乱から出土した土師器坏1点(1134), 須恵器甕1点(1137), 丸瓦5点(T 040~T 044), 平瓦1点(T 045), 石製品1点(Q 009), N 51(13, 19)の搅乱から出土した灰釉陶器塊1点(1136), N 51(11, 19)の搅乱から平瓦1点(T 046), 試掘トレンチの埋め戻し土から出土した灰釉陶器皿1点(1135)である。1135は二川窯跡群で黒窯90号窯式期, 1136は猿投窯跡群か二川窯跡群の判断が難しいが折戸53号窯式期である。

第4章 遺構出土遺物の時期とその他の出土遺物について

個別遺構の概要を繰り返さないが、本章では遺構の切り合いや出土遺物から各遺構の時期を求めるとともに、ピット・グリッド・表土・搅乱の出土遺物についても述べる。なお、時期区分は武蔵国府土器編年（K期～H9期、府中市2021）を基本とするが、図示した個々の出土遺物を、土師器南武蔵型壺は鶴間正昭の編年（鶴間正昭2019）、土師器盤状壺は河合英夫・伊藤貴宏の編年（河合英夫・伊藤貴宏2024）、須恵器は南比企窯跡群と東金子窯跡群編年（古代の入間を考える会2013～2015）、及び南多摩窯跡群編年（服部敬史他2011）、灰釉陶器は猿投窯編年（尾野善裕2015、愛知県2015）を援用して時期を求め武蔵国府土器編年に整合させた。

1. 竪穴建物跡

S I 184は、北側の1224次調査地区で検出された建物跡の南周辺部と考えられる。東側を搅乱とS I 306に壊され、西側は調査地区外に延びる。1001の北武蔵型壺は8世紀前半、1002のコの字状口縁の土師器甕は9世紀中頃～後半、1003と1004の東金子窯跡群の皿は、皿の出現が南比企窯跡群編年のHVII期（以下、南比企窯跡群編年を省略しH○期と表記する）からであり、1003のように口唇部がやや外反する器形はHVIII期に多く見られることから9世紀中頃である。土師器甕と須恵器皿から武蔵国府土器編年H3期～H4期（9世紀中頃～後半）である。なお、S I 184は本調査地区北側に位置する1224次調査地区（『概報39』）で北側部分が検出され、そこではN3期と捉えられている。

S I 301は竈や北東隅部を搅乱で壊されていたが、竈の南側から完形を含む遺物が床面近くから出土している。南比企窯跡群の1009は、内底径／口径比率（内底径÷口径×100以下口内底比という）40%から南比企窯跡群編年のHIX期に該当する。なお、1009と入れ子状態で出土した1005は口内底比36%とやや新しい。覆土中層以下から出土した東金子窯跡群の1010は口内底比が33%だが、口径が大きいことからHX期に、1011は口内底比の39%からはHX期に相当する。南多摩窯跡群の1012の皿、1013の塊、1014の高台塊は器形や口内底比からHIX期～HX期に比定され、南多摩窯跡群のG（御殿山）59号窯式期後半からG25窯式期に併行する。1007と1008は武蔵型のコの字状口縁が崩れた形状を呈している。瓦は丸瓦3点、平瓦2点あり、T001～T003は東金子窯跡群で粘土紐巻き作りから9世紀、T004は生産地不明だが南多摩窯跡群の可能性がある。T005は南比企窯跡群の粘土紐一枚作りで9世紀末頃と考えられる。これらの遺物から武蔵国府土器編年H5期（9世紀末葉～10世紀初頭）である。

S I 302は西側を搅乱で消失しており、南側はS I 301に切られているため古い。出土遺物が少なかったため、時期的には1017の北武蔵型土師器壺、1018～1020の土師器長甕、1021の相模型土師器甕から武蔵国府編年N2期（8世紀前半）である。

S I 303は大半が調査地区外に延びる。出土遺物では、1025はHVII期に相当し、1022は南武蔵型壺の第4段階（8世紀末葉～9世紀中葉）で、武蔵国府土器編年H2期（9世紀前半）である。

S I 304は北周辺部を搅乱で消失しているが、覆土から多くの遺物が出土している。掘り方から出土した1026は第5段階に相当し9世紀後半～末葉に、1027はロクロ成形で、底部はへ

ラケズリだが9世紀後半に位置づけられる。覆土中層～下層から出土した1029は口内底比からHVIII期、1030は口内底比からHIX期で9世紀中頃～後半に、1032は底部のみの破片だがHVII期と考えられる。1035は胎土に銀雲母を多量に含む新治窯跡群の製品である。1036は内外面に施釉された猿投窯跡群の製品で黒窓14号窯式期(9世紀前半～中頃)である。1028の小型甕は、胴部外面はヘラミガキ、内面は刷毛目と黒色処理を施しており搬入品と思われる。1031は内面に炭化物が固形化して付着する。1033は外面に「廿」の墨書がある。瓦は丸瓦と平瓦が出土した。東金子窯跡群の製品で丸瓦は粘土紐巻き作り、平瓦は一枚作りでともに9世紀と思われる。M002は環状鉄製品で用途不明だが類例が武藏国府関連遺跡から出土している。Y001は塊形土製品としたが白色砂質粘土が塊形に硬化したもので用途不明である。ほかにQ003の砥石、Q004の石皿が出土した。覆土上層や中層からやや古い遺物もみられるが、下層～掘り方から出土した遺物から武藏国府土器編年H3期後半～H4期(9世紀後半～末葉)である。

S I 305は西側が調査地区外に延びており出土遺物は少なかった。1040は掘り方出土の南多摩窯跡群で、推定口内底比が38%となりHX期に相当し、南多摩窯跡群G25窯式期に、1039や覆土の1037・1038も同時期と考えられる。瓦の出土は多く丸瓦4点、平瓦4点が出土した。丸瓦ではT011以外は東金子窯跡群で、T009はN51(11, 19)の攪乱から出土した個体と接合した。いずれも9世紀と思われる。平瓦はT015が竈の袖内出土の構築材と考えられる。T012・T013・T015は南多摩窯跡群の平瓦で、作りは側板痕があることから粘土板桶巻き作りと格子叩きにより8世紀と考えられる。Y002は須恵器底部を再利用した小型円形土製品と考えられ弱いヘラ記号が付されるが用途不明である。これらの遺物から武藏国府土器編年H5期(9世紀末葉～10世紀初頭)である。

S I 306は、覆土から床上まで多くの遺物が出土した。覆土下層から出土した1042は第5段階(9世紀後半～末葉)と考えられる。床上の1054、覆土上層と下層が接合した1055、覆土中層の1056、覆土上層の1062は口内底比(推定法量値からの算出を含む)からHVIII期、覆土上層の1057と1058、ピット内出土の1059、床上の1061は口内底比(推定法量値からの算出を含む)からHVII期と考えられる。覆土中層の1070は二川窯跡群で黒窓14号窯式期(9世紀前半～中頃)である。覆土の1046は底部を回転ヘラケズリし内面は黒色処理とミガキに放射状暗文を施す。1047は床上の台付甕完形脚部。1049は覆土上層の武藏型甕の口縁部でコの字状口縁で、1050は武藏型甕の底部と胴部下半である。覆土出土の1052は外面が平行タタキの土師器甕、1053は外面に粗い刷毛目を施す甕である。1065は覆土下層の蓋で高台坏より壺に付されると思われ、胎土が精製され焼成も良好で湖西窯跡群の可能性がある。1069は産地不明の甕で外面平行叩き、内面同心円当て具でSB42(1101)やS I 304からも出土している。瓦は丸瓦4点、平瓦4点が出土した。丸瓦のうち、T017は南比企窯跡群、他は東金子窯跡群である。粘土紐巻作りから9世紀と思われる。平瓦は全て東金子窯跡群で、T021は八坂前窯跡出土品に近い。また、T020の凹面には「入」のヘラ描きが入れられていた。流紋岩製の砥石が2点出土した。これらの遺物から武藏国府土器編年H2期後半～H4期初頭(9世紀中葉～後半)である。

S I 307は全体を調査できたが出土遺物は少なかった。1071～1075の土師器坏と塊は、1071が中層からの鬼高系の坏、1072が中層の北武藏型坏で口唇部は直立し無調整部が無い。1073が覆土の続比企型坏で小さく屈曲する口縁部の外面から内面をナデ、底部はヘラケズリで口縁

部から内面に赤彩を施し、胎土には白色針状物質を含有する。1074が覆土の在地系の壺で内面は斜めナデが認められる。1075が覆土の鬼高系か判断に迷う硬質でススの付着から灯明に使用されたと思われる。1080～1084は盤状壺で、1080は竈右脇床上から、1081は床上からで、1082は覆土下層から、1083は覆土中層、1084は覆土で内面に螺旋暗文が施文される。盤状壺は武藏国府土器編年N2期(8世紀前半)に比定される。1076～1079は南武藏型とした。1076は竈左脇の床上で、弧状形態の底部と体部外面はヘラケズリ調整され、内面は斜格子と螺旋暗文を施す。1077は北東隅部の床上で、丸底の底部と体部外面はヘラケズリ調整され、内面は斜格子と螺旋暗文を施す。1078は床上からで、平底指向の底部はヘラケズリで体部外面には弱い指頭圧痕があり、内面は放射状暗文を施す。1079は覆土上層からで、平底指向の底部はヘラケズリで体部外面には指頭圧痕があり、内面は螺旋と放射状暗文を施す。南武藏型の第1段階(8世紀前半)の初源形態とみられる。竈の右袖先端に埋められていた1085は単孔・甕形の壺で、外面はヘラケズリと線状のミガキ、内面は横ナデとミガキを施す。1086は竈と覆土下層が接合したもので成形と調整は1085と同一であることから接合はしないが1085と同一個体と思われる。大型・単孔・甕形の壺は武藏国府土器編年N2期には消滅するとされている(山口1984)。竈構築材として使用されたことから前段階から使用されていたものと考えられる。1088は口径が小さい厚手の小型甕で床上から出土した。1089は口縁部がくの字状に折れ最大径が胴部にある鬼高系の甕で覆土下層から出土した。1090は丸胴甕の底部で覆土上層から、1091は鬼高系の長甕の底部で床上から出土した。1087は口唇部の先端を段差により一段突出させる。摘み上げるわけではないが明らかに意識した口唇部の作りで、肩部外面は胴部上部まで回転ナデを施している。武藏国府関連遺跡では類例がないが下総地域の在地系甕に近い。1092は覆土上層から出土した湖西窯跡群の甕で外面は平行叩き内面は無文當て具である。遺物から武藏国府土器編年N2期(8世紀前半)である。

S I 308は、北周辺部以外は調査地区外に延びており、北周辺部も搅乱に壊されているところが多く遺物出土も少ない。1095と1096は掘り方から出土し、底部回転糸切り無調整であることから9世紀後半と思われる。1098は覆土下層から出土した無彩皿の小破片で二川窯跡群の折戸53号窯式期(10世紀前半)である。1093は床上からで平底の底部と内面は細かな放射状暗文と赤彩を施す。T025の壺は覆土上層から出土した。方壺の一部分で粘土塊充填作りにより作られており、南多摩窯跡群の大丸窯の製品の可能性がある。これらの遺物から武藏国府土器編年H5期～H6期前半(9世紀後半～10世紀前半)である。

竪穴建物跡の時期をまとめると、最古はS I 302とS I 307のN2期で、その後、四半世紀程度間が空いたあと、S I 303がH2期、S I 306はH2期後半～H4期初頭、S I 304がH3期後半～H4期初頭、S I 301とS I 305がH5期、S I 308がH5期～H6期前半と続く。

2. 掘立柱建物跡

S B42は溝もち掘立柱建物で桁行3間×梁行2間以上の建物である。P1～4がS I 307を切り、P1～1とP1～2がS I 304に切られている。遺物はすべて溝の覆土から出土したものである。1099の盤状壺は小型だが口唇部内面に沈線がみられる。器面が荒れており流れ込みの可能性がある。1100は底部を回転ヘラケズリ調整するが全体に小ぶりであり8世紀末葉～9

世紀初頭と思われる。1101は産地不明の甕で、外面は平行叩き、内面同心円当て具である。S I 304の覆土中層の遺物と接合した。S I 306の1069と同一個体かと思われる。N 2期のS I 307を切り、H 3期後半～H 4期初頭のS I 304に切られ、南西に存在するH 2期のS I 303は至近距離で併存は難しい。このため、N 2期以降に構築されH 2期以前には廃絶したと考えられる。S B 43は柱穴2本を確認しただけで、建物規模などほとんどが不明である。S B 43のP 1-1 α はSD 41に切られており、P 2-1 α の覆土下層から1102が出土した。木葉痕をもつ甕の底部で、相模型甕か古墳時代後期から続く長甕の底部であり、武藏国府土器編年N 1期(7世紀末～8世紀初頭)である。

3. 溝

SD 38は北端で西に折れ曲り調査地区外に延びる。1103は覆土下層からで、第5段階(9世紀後半～末葉)、1104は中層からで口内底比が53%とH VII期(9世紀中頃)に比定され、遺物からは明確な時期は判断できない。SD 38の南側延長は隣接する790次調査地区のSD 4とみられる。SD 39からの出土遺物はないが、SK 325を切るためSK 325よりは新しい。SD 40からは、T 026の平瓦が覆土下層から出土した。平瓦は南多摩窯跡群で板か紐かは不明だが一枚作りで繩叩きと布目压痕から9世紀と考えられる。SD 41からは、内面に暗文と赤彩を施す1105と在地系と思われる1106、及び長甕の口縁部片の1107である。いずれも覆土から出土した小破片である。SD 40とSD 41は出土遺物から時期は判別できなかった。

4. 土坑

SK 325は覆土中から遺物が出土した。下層出土は、1108は螺旋暗文の盤状坏底部で8世紀前半、1113の坏はH VII期(9世紀中葉)、1120の灰釉陶器塊は猿投窯跡群で黒窯14号窯式期(9世紀前半～中頃)である。上層出土は、1111の長甕口縁部が8世紀前半、1109の南武藏型が第4段階で8世紀末葉～9世紀中葉。1114の坏と1119の高台皿はH VII期(9世紀中葉)、1112の須恵器坏底部は8世紀後半である。下層出土の1120は武藏国府土器編年H 2期～H 3期、1113はH 3期～H 4期初頭、1108はN 2期で、上層の出土遺物もH 3期～H 4期初頭までである。このことからSK 325はH 2期～H 3期に遺物が投棄されて一部が埋められたあと、H 4期初頭には完全に埋没したと考えられる。SK 326はSK 325よりも古いが、1121から埋没は同時期の可能性が高い。

5. ピット

1123は東金子窯跡群の長頸壺の口縁から頸部で、口径が10cmは中型でありH VII期～H VIII期(9世紀中頃～後半)に多く、H 2期～H 3期である。1124は灰釉陶器皿の底部で、貼付け高台は粘土紐を貼り付けるのみで調整はあまりしていない。二川窯跡群の百代寺窯式期(11世紀後半)でH 9期である。1125は東金子窯跡群で内底径6.3cmを測る。H VII期(9世紀中頃)と思われ、H 2期～H 3期初頭である。1126はロクロ成形で、口内底比32%とH XI期(10世紀前半)であり、H 6期前半である。1127は黒色処理の塊で内面はミガキ、外面は指頭压痕による調整で、口唇部外面にも黒色処理がみられる。底部は円盤を台にその上から体部を作り出す。この器形は類

例がなく時期は9世紀後半～10世紀か。1128は灰釉陶器塊で、猿投窯跡群の黒笛90号窯式期（9世紀後半）でH4期～H5期である。Q008は砂岩の砥石で2面使用している。

6. N 51(12, 22)・N 51(11, 23)

小グリッドの第Ⅱ～Ⅲ層から出土した遺物である。(12, 22)からは須恵器坏1点と瓦2点である。1129は南比企窯跡群で、口内底比50%からHⅦ期（9世紀中頃）であり、H2期～H3期初頭である。T030は丸瓦で胎土や焼成から東金子窯跡群で、粘土紐巻き作りである。T032は平瓦で南多摩窯跡群の製品だが紐か板か不明の一枚作りである。(11, 23)からは土師器甕1点と丸瓦1点である。1130は外面を格子叩きする土師器甕で産地や時期は不明。T031は東金子窯跡群で、粘土紐巻き作りから9世紀である。

7. 2区表土

北側調査地区の遺構確認などで出土した遺物である。1131は南比企窯跡群で、底部を全面へラケズリ調整し内底径7.2cmを測る。器高が低いがHⅣ期（8世紀後半）でH4期である。1132は灰釉陶器の端反皿で二川窯跡群の黒笛90号窯式期～折戸53号窯式期の範疇で9世紀後半～10世紀前半と思われ、H4期～H6期である。1133は灰釉陶器皿で猿投窯跡群の黒笛90号窯式期（9世紀後半）でH4期～H5期である。T033は胎土が南多摩窯跡群と思われる。T034は東金子窯跡群で重量感がある。T035は南比企窯跡群だが小片のため作りなどは不明。T036は東金子窯跡群で粘土紐巻き作り。T037は東金子窯跡群で赤焼けだが硬く締まる。T038とT039は南多摩窯跡群で凹面に側板痕があるため粘土板桶巻き作りで、T038は、凸面は格子叩きで表面は灰白色だが断面はにぶい黄橙色であり、T039は表面が黒色だが断面は浅黄色を呈する。T038とT039は、S I 305のT012・T013・T015と同じく8世紀と考えられる。

8. 搅乱

・N 51(12, 21)の搅乱からの出土遺物

小グリッドN 51(12, 21)に掘られていた長方形の搅乱で、深さは確認面から90cmを測る。現代に近い遺物に混入して古代の遺物がまとまって出土した。1134は南武藏型で第4段階（8世紀末葉～9世紀中葉）に位置づけられ、武藏国府土器編年H1期～H2期に相当する。T040～T044は丸瓦で、T040とT041は同一個体の可能性がある。T040～T042とT044は東金子窯跡群で粘土紐巻き作りとナデ調整と共通した作りで9世紀の所産。T043は軟質で産地不明。T045の平瓦はS I 304のT007と同じ作りであり、東金子窯跡群の9世紀の製品である。Q009は中央に方形の穿孔を施した温石か。古代よりは近現代の遺物の可能性が高い。

・N 51(13, 19)の搅乱からの出土遺物

1136は猿投窯跡群か二川窯跡群のどちらとも言えるものであるが折戸53号窯式期（10世紀前半）で、武藏国府土器編年H6期前半である。

・N 51(11, 19)の搅乱からの出土遺物

T046の平瓦は粘土紐一枚作りで凸面はヘラナデ調整と縄当てを施し、やや軟質の焼成で、産地不明だが胎土からは東金子窯跡群の可能性もある。

第5章　まとめと考察

第1節　本調査成果

本調査地区では、古代の竪穴建物跡9棟、掘立柱建物跡2棟、溝4条、土坑2基、ピット24基を検出した。出土遺物は現場作業終了時にテンバコ18箱である。種別は土師器、須恵器、土師質土器、灰釉陶器、瓦、鉄製品、土製品、石製品（砥石等）、礫、炭化種子で、まとまって出土した遺構はSI 301、SI 304、SI 306、SI 307、SK325である。本項では前章において詳細した各遺構出土土器の時期から本調査地区における遺構の消長について整理するとともに出土量が多かった瓦について述べる。

1. 遺構の存続時期について

前章において、出土遺物から各遺構の時期を求めたものをまとめたのが第2表である。本調査地区でもっとも古い遺構は、柱穴の覆土下層から長胴甕底部（1102）が出土したSB43でN1期に比定される。ただ、柱穴2基の検出であるため明確に掘立柱建物跡とは言い切れないが、SI 307（N2期）とは併存せずに短期間に取り壊された可能性もある。N2期の建物はSI 307とSI 302である。SI 307は床上から出土した遺物と土層観察から人為的埋め戻しを考慮した。SI 302は床上から出土した北武藏型坏（1017）などからN2期とした。N3期以降SI 302は短期間存続し、SI 307に代わりSB42が建てられたと思われる。SB42はN3期から近接して併存しないSI 303が建てられるH2期以前まで存続したと考えられる。H2期以降は2～3棟の竪穴建物が併存して存在する時期がH5期まで継続した。SB42は武藏国府関連遺跡でも稀有な建物跡でありN3期～H2期の主要建物と考えられる。荒井健治氏はN4期からH3期まで、特に国衙北側で竪穴建物が減少し、この付近に掘立柱建物が多くなることを指摘している（荒井2014）。本調査地区の掘立柱建物と竪穴建物が併存しないことが、本調査地区を含む国衙北側周辺一帯でみられることは注目に値しよう。ただ、SB42は遺構全体を調査できなかつたため建物の性格までは明らかにできなかつた。

第2表　主要遺構　変遷表（N 51－45 1969次調査）

遺構種別	遺構名	N1期	N2期	N3期	N4期	H1期	H2期	H3期	H4期	H5期	H6期	H7期
竪穴建物跡	SI 184											
	SI 301											
	SI 302											
	SI 303											
	SI 304											
	SI 305											
	SI 306											
	SI 307											
	SI 308											
掘立柱建物跡	SB42											
	SB43											

※凡例　　■想定される時期　■出土遺物による時期

2. 出土瓦について

本調査地区から、土器とともに多くの瓦が出土した。破片の大きさは大小あるが、総数92点を数える。多くの瓦が竪穴建物跡や表土・攪乱から出土したもので、図示したのは46(破片点数は58)点である。産地別では南比企窯跡群が2点と少なく、東金子窯跡群が26点、南多摩窯跡群が8点、不明が10点である。東金子窯跡群の大部分は9世紀に比定されるもので八坂前窯跡に近いものもある。武蔵国府関連遺跡における瓦葺き建物は国衙と多磨寺の主要施設が代表的なものとなるが、武蔵国分寺跡から持ち込まれる可能性も否定できないため瓦の入手経路は不明である。なお、南多摩窯跡群の製品であるSI 305の竈袖構築材T 015のほかT 012・T 013、SK 325のT 028、表土のT 038が凹面に側板痕が残る粘土桶巻き作りで、凸面が格子叩きであることから多磨寺周辺で使用されていた瓦の可能性がある(『概報25』)。ただ、瓦の二次利用については不明な点も多いため今回は多くの資料を提示することに努めた。

第2節 考察

ここでは今回の調査において検出された遺構と出土遺物についての考察を行う。

遺構は、「溝もち掘立柱建物跡」(N 51—SB 42)の構造と武蔵国府関連遺跡における「溝もち掘立柱建物跡」と、並行して走行するSD 40とSD 41の位置や規模から南北道路跡3の可能性について検討する。遺物はSI 307から出土した内面に斜格子と螺旋暗文をもつ土師器壺が南武蔵型壺に分類できるかについて考察する。

1. 溝もち掘立柱建物跡 (N 51—SB 42) とその存続時期

柱穴間を溝でつなげる「溝もち掘立柱建物跡」であるSB 42は、大半が調査地区外に延びるが、南北3間×東西(3間)の南北棟の側柱建物跡と思われる(註1)。規模は桁行5.1m×梁行(5m)と想定される。検出した柱穴は5基で方形を呈する。柱穴と溝とは80~100cmの高低差があり柱穴と溝の関係は土層観察から次のような埋め戻しの手順を想定できると思われる。

- ① 柱を立てる(約径20cmの柱を柱穴の中心付近に立てる)。
- ② 柱穴を溝の深さまで埋める(P 1—3の9と10層、P 1—4の21層、P 2—41層、ある程度の版築を行う)。
- ③ 溝もちの溝を埋める。

この埋め戻し方法は中田英氏の想定した構築工程に概ね沿っている(中田1981)。ただ、SB 42の土層観察から柱間に埋められた壁体の痕跡は検出できなかった。

武蔵国府関連遺跡では1,300棟以上の掘立柱建物跡が検出されているが、溝もち掘立柱建物跡の検出例は10例程度と極めて少なく、全体が検出された事例は153次調査地区(『清水が丘』)の桁行5間×梁行2間の側柱建物跡(N 90—SB 9)、740次調査地区(『報告33』)の桁行4間×梁行3間の側柱建物跡(M 89—SB 1)の2棟である。

153次調査地区は国府東側の清水が丘地域に位置する。SB 9は桁行の2~3本の柱穴を溝でつなぐが梁行は溝を持たない。153次調査地区では掘立柱建物跡13棟が建て替えを繰り返して存続し、ただ、SB 9は一時期に単独で存在したと考えられている。

740次調査地区は国衙の南方地域に位置する。SB1は斜面地に立地しているため溝の遺存状態が悪いが、桁行・梁行とともにSB9と同じく2～3基の柱穴を溝でつなげているが桁・梁とともに溝を持ち、北西の隅柱穴を中心として桁行と梁行の両方向にL字状の繋がりをみせる。SB1は国衙南側の二条大溝が途切れる門の想定地に位置しN3期の竪穴建物跡を切る。国衙の二条大溝はH4期～H5期（9世紀後半～10世紀初頭）の竪穴建物跡に切られることからH4期までに機能を失ったと考えられている。SB1は門の想定地にあることから二条大溝が機能を失うH4期以降に建てられたと考えられる。

武藏国府関連遺跡の溝もち掘立柱建物跡は、総ての柱穴を繋げ桁行と梁行が同間数と想定されるSB42、長い桁行の柱穴2～3本を繋げるSB9、桁行と梁行の2～3基の柱穴を繋げるSB1に分類され、柱穴の平面形においても方形と円形が混在するSB9とSB1に対して方形で統一されるSB42とは異なる。時期は、N3期～H1期のSB42に対して、単独で存続するSB9は9世紀と考えられ、SB1はH4期以降の構築である。SB42が8世紀であり、SB9とSB1は9世紀と構築時期の違いが、全周する溝と柱穴間を繋げる溝や柱穴の平面形の相違と捉えることもできる。ここでは、SB42・SB9・SB1が溝もち掘立柱建物跡であり、柱穴間の溝の柱穴の繋ぎ方や柱穴の平面形で分類できることと構築時期の違いを示した。今後、建物の性格などについて明らかにされることを期待したい。

2. SD40とSD41について（南北道路跡3）

調査地区の北側で検出された溝（N51－SD40, N51－SD41）は、2条がほぼ平行に南北に延び、芯心間は3.2mを測る。溝間では明確な硬化面は確認できなかったが平行に延びる両溝は道路跡の側溝である可能性が高く周辺の調査状況から道路跡の可能性を示したい。

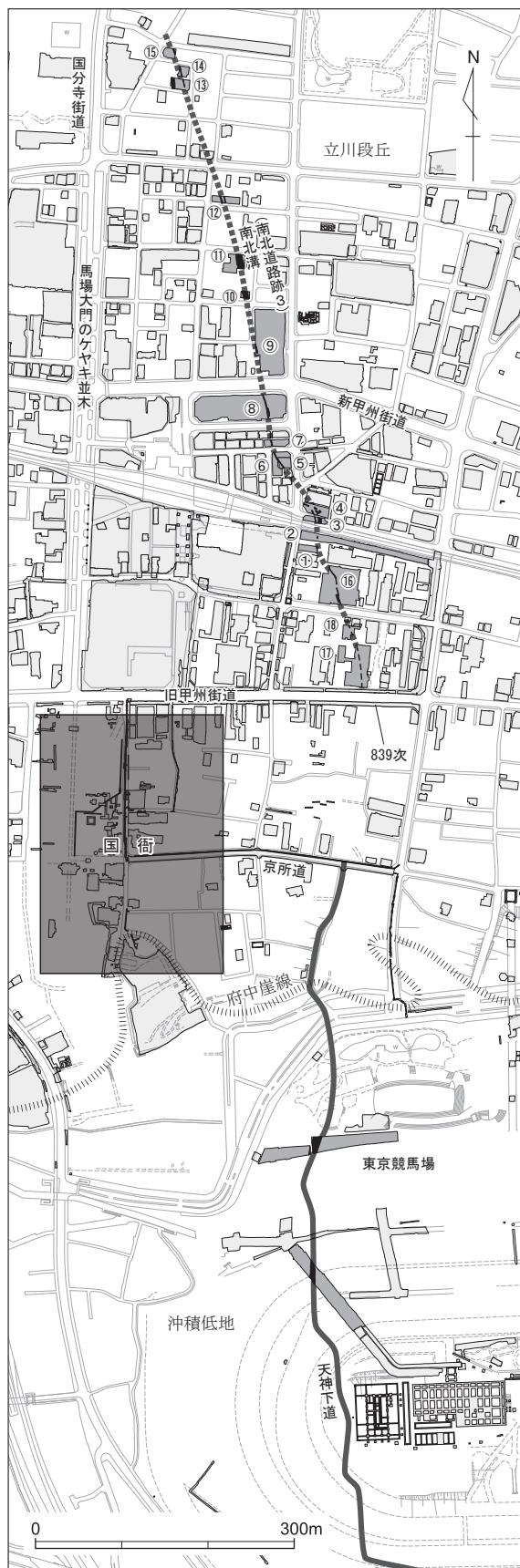
本調査地区北方の調査では南北に延びる溝と硬化面を伴う道路跡が調査され、北端の520次調査地区（『概報29』）から、南端の790次調査地区（『概報35』）まで全長740m以上を測り「南北道路跡3」と呼称されている（第5図、第3表）。南北道路跡3の詳細は『概報49』に述べられ、本調査地区が北側に885次調査地区（『概報19』）と南側に南端の790次調査地区が位置しているため南北道路跡3が存在する可能性は高かった。

885次調査地区で南北道路跡3であるSD12を南に延長すると本調査地区のSD41に繋がると考えられ、SD41と西側3.2mに併行するSD40が側溝を伴う道路跡とすると南北道路跡3と想定される。なお、SD40の北側が885次調査地区でSD12の西側3mに存在するSX101であるならば、南北道路跡3は側溝芯心間約3mの道路跡と考えられる。

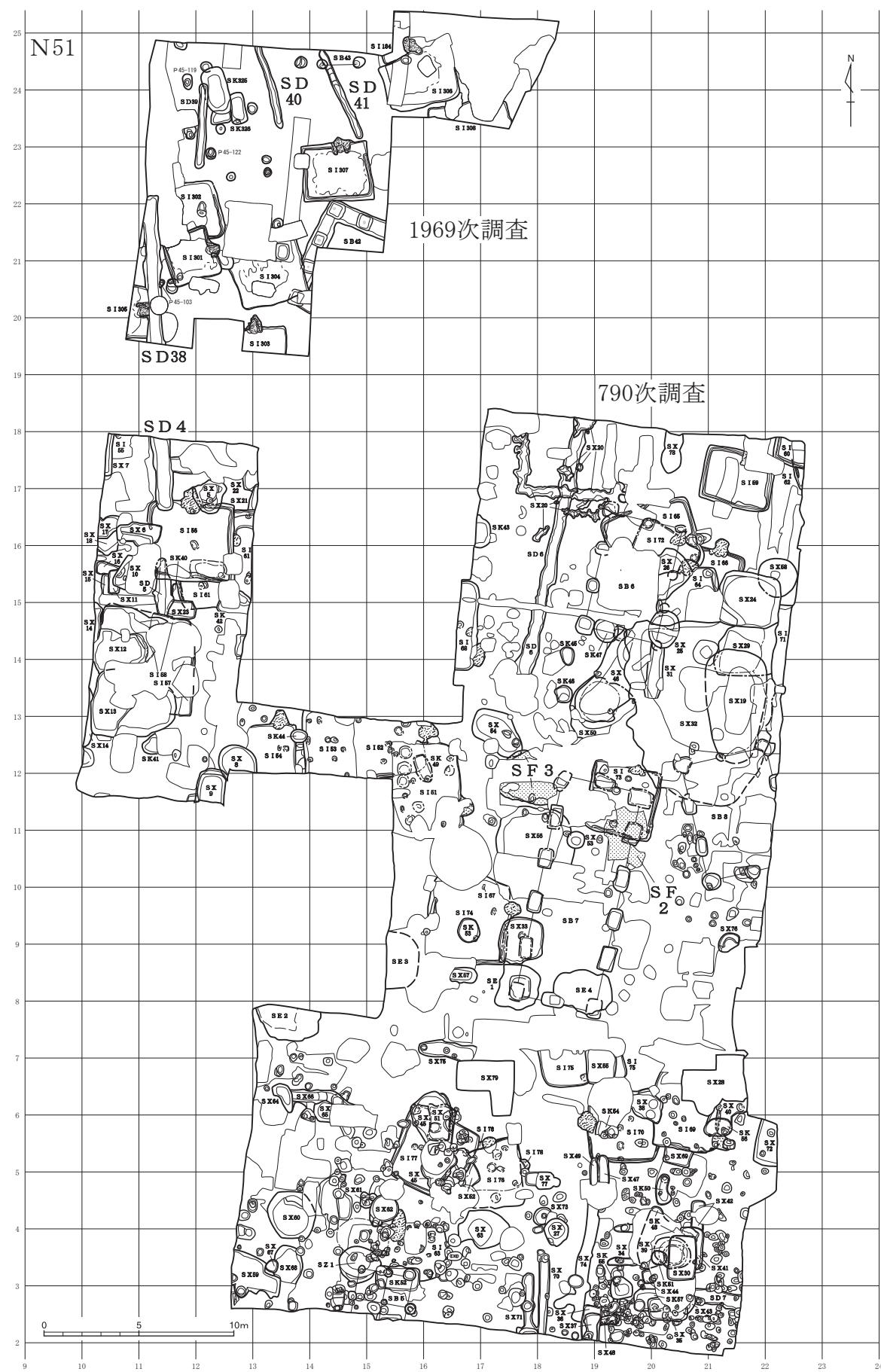
本調査地区南側の790次調査地区の南北道路跡3は『概報49』では南北溝（SD4）がSD12の延長とされていたが、北西から南南東に走行する

第3表 南北道路跡3のルート

No.	通次数	遺構名	掲載報告書
1	1714	N41－SD57	『概報49』
2	1275	N41－SD53	『報告39』
3	114	N41－SD19	『概報33』
4	675	M50－SD39	『概報36』
5	258	M50－SD32	『概報24』
6	244	M50－SD29	『概報24』
7	251	M50－SD31	『概報20』
8	414	M40－SD4	『報告15』
9	672	M40－SD10	『報告56』
10	822	M30－SF2	『概報35』
11	1361	M30－SD9, M30－SF3・4	『概報41』
12	147	M30－SD3	『概報16』
13	96	M19－SF1	『概要11』
14	454	M19－SF3	『概報27』
15	520	M19－SF4	『概報29』
16	885	N51－SD12, N51－SF4	『概報19』
18	1969	N51－SD40, N51－SD41	本報告
17	790	N51－SF2, N51－SF3	『概報35』



第5図 南北道路跡3のルート (1/8,000)
※『概報49』を変更・加筆 数字は第3表のNo数字と対応



第6図 南北道路跡3関連図 790次・1969次 (1/300)

SD12から、ほぼ南北に走行するSD4とは走行方向が極端に変化する。SD4は、本調査地区の調査で検出されたSD38と同じ遺構であり、北端で西へ直角に折れることが明らかになっている。したがって、790次調査地区の南北道路跡3はSD4には比定できないためSD41とSD40の走行方向の南側延長線上に位置する道路跡(SF2, SF3)が南北道路跡3である可能性が高い(第6図)。

南北道路跡3の時期について『概報49』では、885次調査地区で13世紀後半の中世土壙墓群に切られていることから下限は13世紀後半に比定される。また、790次調査地区のSD4は南北道路跡3ではないことが明らかになつたため始まりの時期が明確ではなくなつたといえる。本調査地区のSD40, SD41の南側にはSI307, SB42が存在するが切り合い関係はないため時期を判断することは難しい。ただ、SI307やSB42よりも新しいと考えられるなら平安時代には存在し、13世紀後葉以前に廃絶したのではないか。いずれにしても、南北道路跡3は平安時代から中世にかけて武蔵国府の中心部分を避けて南北をつなぐ道路跡であることから今後の実態解明が期待される。

3. SI307の南武藏型壺について

SI307から内面に斜格子と螺旋暗文をもつ土師器壺(1076・1077)が出土した。1076と1077は弧状底部と丸底底部を呈し、外面は口縁部を横ナデ、底部と体部外面をヘラケズリ調整する。内面はナデの後に斜格子と螺旋暗文を施す。SI307からは1078の放射状、1079の放射状と螺旋暗文が施された土師器壺がある。底部は欠損しているが弧状形態の底部と推定されヘラケズリ調整である。体部外面には指頭圧痕が残り、口唇部は横ナデ、内部は横ナデの後に放射状や螺旋暗文を施す。体部外面に指頭圧痕が残る1078と1079は南武藏型壺に分類した。1078・1079の南武藏型壺と1076・1077では放射状と斜格子の暗文がミガキ的でなく削るようにやや深く刻まれる施文方法に共通点がみられた。そこで、斜格子と螺旋暗文を持つ1076・1077が南武藏型壺に分類できるかを検証する。

1078・1079の南武藏型壺は、南武藏型壺の出現とその変遷について論じた鶴間正昭氏の分類では出現期の初源形態に含まれる(鶴間2019)。そこで、出現期から成立期の南武藏型壺が多く出土し、鶴間氏も分析の対象としている神奈川県横浜市港北ニュータウン遺跡群の権田原遺跡・北川表の上遺跡・勝田原遺跡の3遺跡から出土した資料を実見し、SI307の出土資料と胎土や焼成、暗文の施文方法などを中心に肉眼観察によって比較検討した(註2)。

権田原遺跡DH8号住居址(第7図)の南武藏型壺は、1が斜格子と螺旋暗文を施す。斜格子暗文が1076～1079と同じく深く刻まれており、斜格子暗文の施文方向と順序は1076や1077と同じであった(註3)。2～5は口径に幅があるが平底を指向した作りで体部は内湾しながら立ち上がり口唇部は外反しない。体部外面の指頭圧痕はナデにより不明瞭となっている。2の底部ヘラケズリ調整は1076の底部調整と似通っていた。

北川表の上遺跡52号住居址(第8図)の南武藏型壺は、2は丸底気味で暗文は深く刻まれるが、3は平底で暗文は弱く不明瞭であった。2が1078や1079に近いと思われる。5と6の盤状壺が共伴する。57号住居址(第9図)の南武藏型壺は、8は口径10.5cmで内面に斜格子と螺旋暗文が施され、9は口径11.7cmで同じく内面に斜格子と螺旋暗文が施される。ともに暗文は

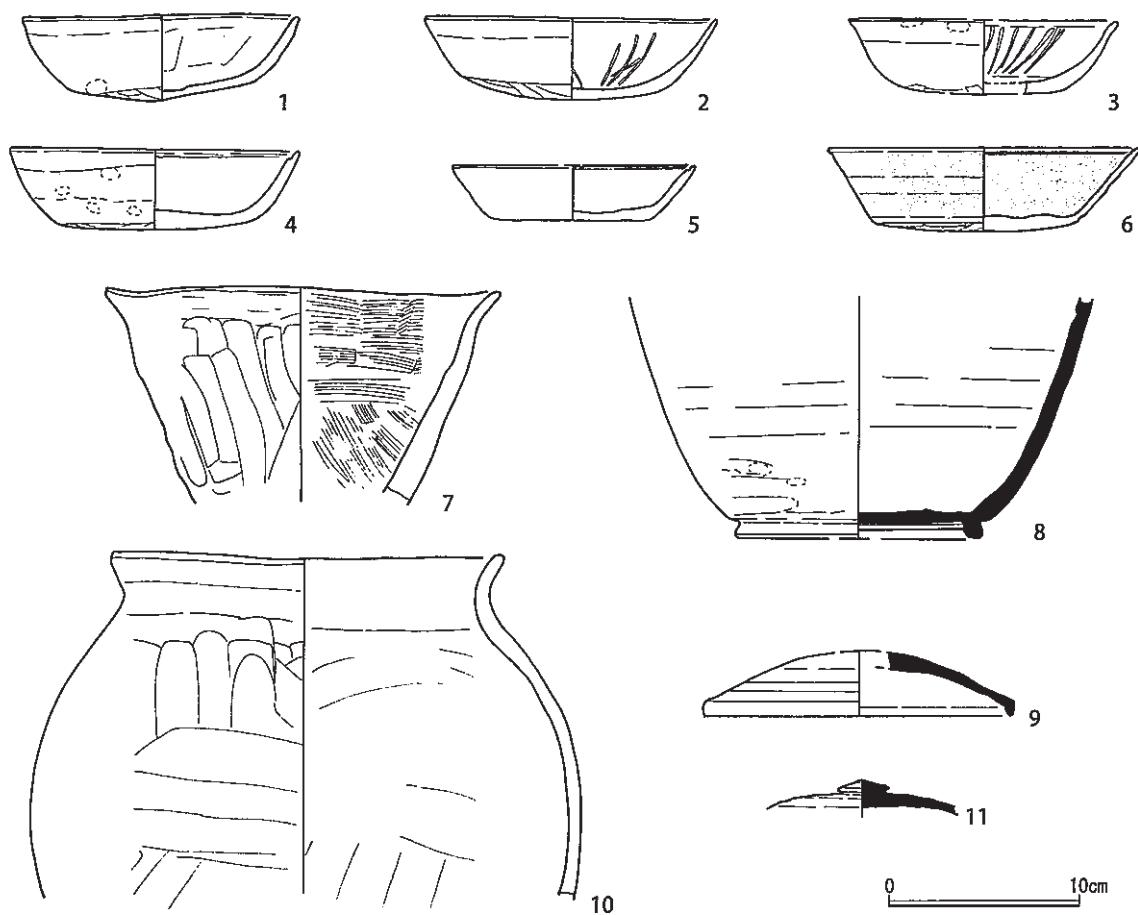
深く刻み、斜格子暗文の施文方向と順序が1076や1077と同じであった。さらに、8は断面がサンドイッチ状になり表裏面は橙色で中央が白褐色を呈する色調は1076や1078と同様である。また、3には底部に黒斑があり、口縁部内外面の一部には煤が付着する。底部の黒斑は1076や1079にもみられる。南武藏型壺以外に4が盤状壺で、7は盤状壺の模倣壺と10～12の須恵器高台壺は湖西窯跡群の製品が共伴する。

勝田原遺跡H57号住居址(第10図)の南武藏型壺は、3に斜格子と螺旋暗文が施される。やや平底気味の底部から広がりながら立ち上がり口唇部のナデは強いナデが施される。底部はヘラケズリ調整で体部ははっきりしないが指頭調整の後にナデ調整を加えているとみられる。内面の斜格子暗文はやや幅広く深い刻みのように明瞭で、施文順序も含めて1076や1077と同じである。1と4は平底で内面には放射状暗文を施す。2は丸底で内面には放射状暗文を施し、外面は底部のヘラケズリにより体部との区分がはっきりしている。いずれの暗文も深めに刻まれており1078や1079に近い。

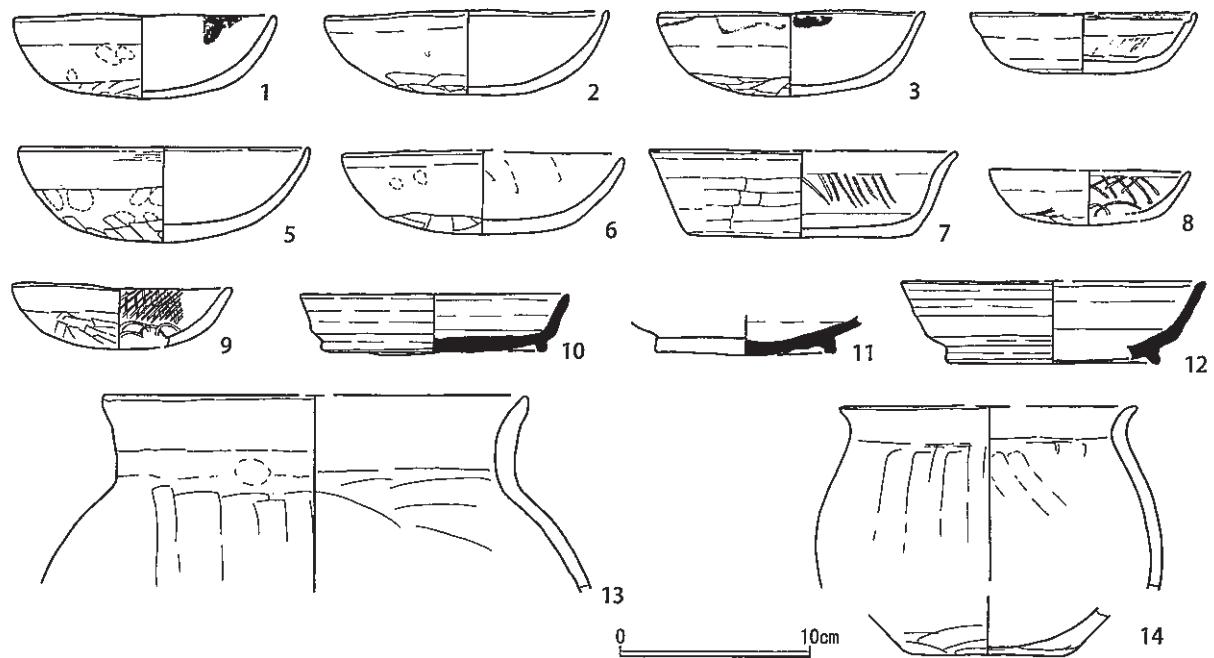
港北ニュータウン遺跡群の出土土器とS1307の1076～1079との類似点をまとめる。1076と1077の斜格子・螺旋暗文は権田原遺跡DH8号住居址の1と北川表の上遺跡57号住居址の8と9、および勝田原遺跡H57号住居址の3と同じ手法で施文されている。権田原遺跡DH8



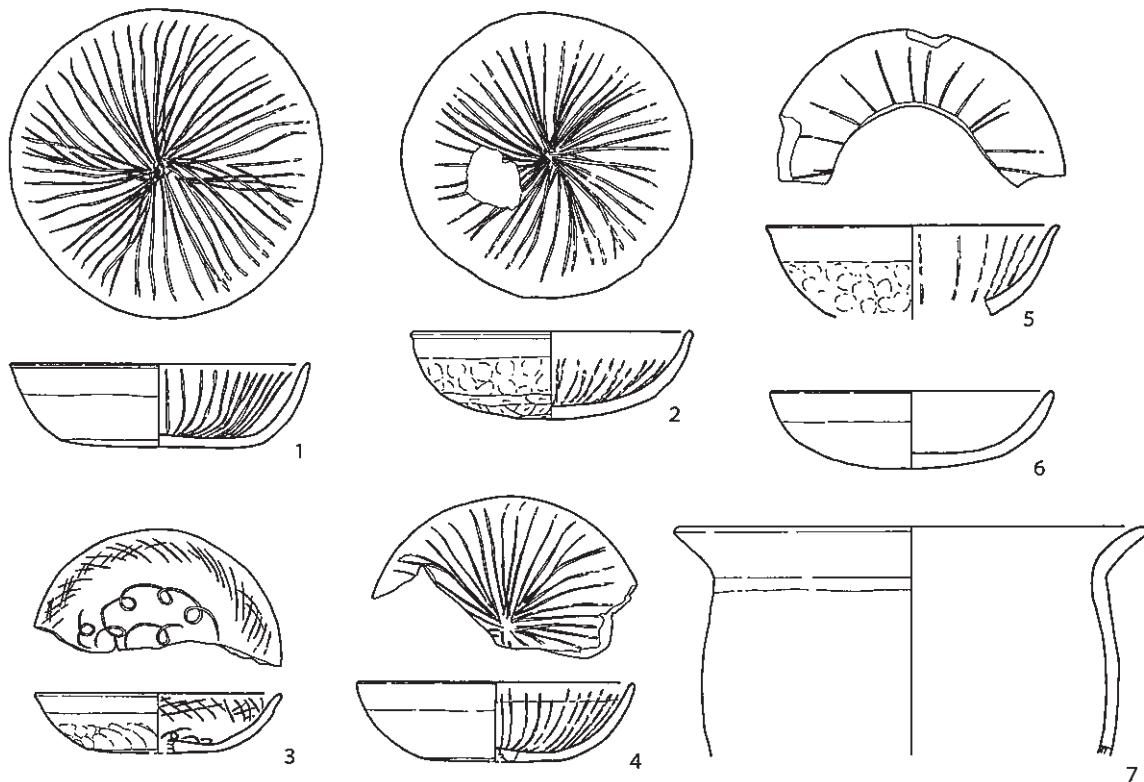
第7図 横浜市権田原遺跡DH8号住居址出土遺物 (1/4)



第8図 横浜市北川表の上遺跡52号住居址出土遺物（1／4）



第9図 横浜市北川表の上遺跡57号住居址出土遺物（1／4）



第10図 横浜市勝田原遺跡H 57号住居址出土遺物（1／4）

号住居址の2は平底であるが底部ヘラケズリ調整が1076に近しい。1076と1079にある底部外面に黒斑が北川表の上遺跡57号住居址の2にも見られた。1078の放射状暗文は北川表の上遺跡52号住居址の2と同じである。1076や1079の断面がサンドイッチ状となる焼成は北川表の上遺跡57号住居址の8と同じであった。このように港北ニュータウン遺跡群出土土器とS I 307の1076～1079は類似する遺物が認められ、1078と1079は暗文や弧状形態の底部、指頭圧痕などから南武藏型壺の初源形態で問題はない。

鶴間正昭氏は、初源形態の南武藏型壺の製作技法として、口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ調整、内面がナデ調整と伝統的な土師器壺の製作技法を踏襲しつつ体部が指圧調整ないしナデ調整が観察されるものとした。しかし、体部に指頭圧痕を残すものは稀で、指圧調整の後にナデ調整やヘラナデが加わり、むしろ指頭調整痕がはっきりしないものが通有とする（鶴間2019）。1076と1077は、体部調整をヘラケズリと判断して図化したが、強めのヘラナデの可能性もある（強めのヘラナデとヘラケズリの区別は難しい）。ただ、暗文の施文方向と方法や底部の黒斑、断面がサンドイッチ状になる点など港北ニュータウン遺跡群の斜格子・螺旋暗文の土器との類似点は多いことから、体部調整に拘らず1076と1077も南武藏型壺の初源形態の範疇に収めておきたい。

ここではS I 307の斜格子と螺旋暗文をもつ1076と1077が南武藏型壺に分類できるかを検証した。港北ニュータウン遺跡群出土土器との比較検討により南武藏型壺の初源形態の範疇に収めることとした。武藏国府関連遺跡では、底部が丸底や弧状形態で内面に斜格子と螺旋暗文をもつ土師器壺の類例は報告されていない。ただ、斜格子暗文の土師器壺が1435. T次調査（『報

告51】) M88-SX207(大型円形土坑)の覆土から出土している(1183)。約1/2残存し、推定口径15.0cm、器高3.6cmを測る。底部や体部は丸みを帯び、口縁部はやや外傾して立ち上がる。口縁部と内面はヨコナデ、体部と底部はナデからヘラミガキを施す。1076と1077は略完形であるため武蔵国府関連遺跡では他に類のない貴重な資料である。

[註]

- 1) 「溝もち」掘立柱建物跡については中田英氏の分類による。中田氏は、布掘と溝もちの異なる点として以下の3点を挙げている(中田1981, 2014)。
 1. 断面をみると、溝が一定の深さに深く掘られている布掘に対して、「溝もち」では柱位置の坪形掘り方をつなぐように浅い布掘状の溝が掘られていて、坪掘部分と溝部分の深さは異なっている。
 2. 平面をみると、布掘は柱筋の両端の柱穴にまで及ぶ例(底など身舎以外の柱穴を除く)又は二柱穴間を結ぶ例がみられるが、「溝もち」では必ずしもそうではなく、柱筋の両端の柱穴にまで及ぶ例はむしろ少なく、断続的に掘られる例の方が多い。
 3. さらに、布掘は一定方向に掘られる例が多いが、「溝もち」は一棟の掘立柱建物において平側・妻側の両方向に掘られるという場合も多く、隅柱穴を中心に平側・妻側の両方向にL字状につながる例もみられる。また、すべての柱穴をつなぎ全周する例もみられる。
- 2) 港北ニュータウン遺跡群出土資料の実見とS I 307出土資料との比較をするにあたり、公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターの古屋紀之氏と中嶋友氏の多大なるご協力により実現した。また両氏から多くのご教示を頂いた。
- 3) 斜格子暗文の施文順序は、左上から右下に斜方向の暗文を全周に入れた後、右上から左下に斜方向の暗文を重ねて斜格子を作り上げている。斜格子は底までは達していない。

引用・参考文献

[論文等]

- 中田 英 1981 「古代東国集落における掘立柱建物の一考察—「溝もち」掘立柱建物遺構の壁構造の復元について—」『神奈川考古』第12号 神奈川考古同人会
- 中田 英 2014 「茅ヶ崎市下寺尾西方A遺跡H9号掘立柱建物について」『かながわ考古学論集』かながわ考古学論集刊行会
- 山口辰一 1984 「第6章 付論—武藏国府関連遺跡における土器編年試論—」『武藏国府関連遺跡調査報告V—国府地域の調査4—本文編』府中市教育委員会・府中市遺跡調査会
- 服部敬史他 2011 「南多摩窯跡群須恵器編年の暦年代検討」『八王子市史研究』創刊号 八王子市
- 加藤恭朗他 2012 『古代入間の土器と遺跡（I）』古代の入間を考える会
- 加藤恭朗他 2013 『古代入間の土器と遺跡（II）』古代の入間を考える会
- 加藤恭朗他 2014 『南比企窯と東金子窯（I）』古代の入間を考える会
- 加藤恭朗他 2015 『南比企窯と東金子窯（II）』古代の入間を考える会
- 尾野善裕 2015 「灰釉陶器生産地域の拡大—猿投窯からみた駿遠地域の窯」『灰釉陶器生産における地方窯の成立と展開』第3回東海土器研究会資料集
- 愛知県史編纂委員会編 2015 『愛知県史 別編 窯業1 古代猿投系』愛知県
- 荒井健治 2014 「武藏国府の時系列的分析」『東京考古』32 東京考古談話会
- 福田健司 2017 『土器編年と集落構造』考古調査ハンドブック16 ニューサイエンス社
- 鶴間正昭 2019 『律令国家形成期の土器様相』六一書房
- 酒井清治 2022 「南比企窯跡群の須恵器編年と生産」『南比企窯跡群総括報告書I』鳩山町教育委員会
- 河合英夫他 2024 「「土師器盤状坏」の出現と解体」『神奈川を掘るV』玉川文化財研究所
- 府中市 2021 『新府中市史 原始・古代資料編3 考古資料2』

[報告書（他市町村）]

- 河合英夫他 2001 『岡上-4遺跡第2地点』岡上-4遺跡発掘調査団
- 山田光洋他 2009 『北川表の上遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告42 横浜市教育委員会, 財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 古屋紀之 2013 『権田原遺跡IV』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 46 横浜市教育委員会, 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 白崎智隆他 2015 『国府台遺跡 第13地点（6）～（11）』独立行政法人国立国際医療研究センター, 株式会社コクドリサーチ

[報告書（府中市）：民間調査会社]

- 大成エンジニアリング株式会社 2022 『武藏国府関連遺跡調査報告 府中宮西町計画に伴う埋蔵文化財発掘調査（1888次）』
- 大成エンジニアリング株式会社 2024 『武藏国府関連遺跡調査報告 パウス府中新築工事に伴う埋蔵文化財調査（1925次）』
- 株式会社コクドリサーチ 2023 『武藏国府関連遺跡調査報告 セブン-イレブン府中寿町2丁目店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（1929次）』

[報告書・概報（府中市）]

- 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2004 『府中市埋蔵文化財調査報告第33集 武藏国府関連遺跡調査報告31 一国府地域の調査23—都営府中宮町三丁目アパート建設に伴う事前調査』
- 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 1985 『清水が丘遺跡 府中市都市計画道路2・1・4号線建設に伴う事前調査』
- 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2012 『府中市埋蔵文化財調査報告第51集 武藏国府関連遺跡調査報告47 一国府地域の調査33—武藏国府跡（御殿地区）』
- 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 1996 『府中市埋蔵文化財調査報告第17集 武藏国府関連遺跡調査報告17 一国府地域の調査15—府中駅南口第二地区第一種市街地再開発事業建設に伴う事前調査』
- 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2005 『府中市埋蔵文化財調査報告第36集 武藏国府関連遺跡調査報告34 一国府地域の調査26—府中駅南口第三地区第一種市街地再開発事業建設に伴う事前調査』
- 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2012 『府中市埋蔵文化財調査報告第55集 武藏国府関連遺跡調査報告51 一出土遺物等整理報告3—』
- 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2001 『武藏国府の調査19 一平成10年度府中市内発掘調査概報—』
- 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2004 『武藏国府の調査25 一平成7年度府中市内発掘調査概報—』
- 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2004 『武藏国府の調査27 一昭和63年度府中市内発掘調査概報—』
- 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2007 『武藏国府の調査35 一平成6年度府中市内発掘調査概報—』
- 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2008 『武藏国府の調査38 一平成14年度府中市内発掘調査概報—』
- 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2009 『武藏国府の調査39 一平成15～18年度府中市内発掘調査概報1—』
- 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2019 『武藏国府の調査49 一平成27年度府中市内発掘調査概報—』

第4表 出土遺物集計表(点数)

出土地点	点数計	土師器				土師質土器				須恵器				灰陶器				瓦		土製品		鉄・鋳物			
		壊	壊	壊・合付壺	壺・甕	壊・甕(内黒)	壊	高台壺	高台壺	壺	高台壺	壺	壺	甕	甕	甕	甕	甕	甕	甕	甕	甕	甕	甕	
S1 184	139	9	93			6			24			1	2	3										1	
S1 301	687	9	341		4	69	1	2	225	1	1			5	13		9							7	
S1 302	132	8	71			1	15	2		24				1	6	1								3	
S1 303	201	9	128			13				33				2	11									4	1
S1 304	1,078	30	508		12	125			355			1	9	6	23								6	3	
S1 305	183	1	58			46				58		1	2	2	8								5	2	
S1 306	2,360	99	1,412		1	14	119			589	5	5	12	35	16	26	7	6	8				6		
S1 307	188	35	111		3	1			29					1	7									1	
S1 308	89	1	49			7	2		29		1														
SB42	47	6	21			2				13				1	1	1									
SB43	1		1																						
SD38	77	7	24	3		3			30							9	1								
SD40	22		5	1		4			8								4								
SD41	22	2	6							10		1				2									1
SK325	599	64	213	4		57	2		221	1		1	10	3	16		1	2	4						
SK326	10	1	1			1			2							5									
ビット	72	10	21			3	14			15				1	6			1	1						
N51(11, 22)	235	19	78			37			75				5	1	14				2	3	1				
N51(11, 23)	58	9	19			18			8					4											
N51(11, 24)	29	3	11			7			7				1												
N51 45 表土	639	49	213	2		7	111		182			4	5	2	50		4	4					6		
N51 45 撮毛	255	16	97			3	29	2		72	1	2	4	3	18	1	3	2	2						
計	7,123	387	3,481	10	17	28	686	9	1	2,009	3	8	12	15	82	35	227	1	12	27	20	15	34	1	

※点数は破片1点を表し、接合した遺物も接合した破片数を数えた。なお、図版掲載した遺物は点数に含まれていない。

第5表 出土遺物集計表(重量: g)

出土地点	重量計 (g)	土師器						土師質土器						須恵器						灰釉陶器							
		壊	甕	壺	台付甕	壺・甕 (内黒)	壺・甕 (内黒)	高台壺	壺	高台壺	壺	高台壺	壺	蓋	瓶	蓋	瓶	蓋	瓶	蓋	瓶	壺	瓶	瓦	土製品	鉄滓	
S1 184	567.8	54.6	331.7			15.1		101.3		31.0	10.4	15.8												7.9			
S1 301	3,093.2	22.8	1,135.9		15.1	179.1		16.0	5.5	1,045.9	32.9	39.0		28.6		244.9		33.6						293.9			
S1 302	931.5	23.2	533.5		3.2	44.2	15.0	129.4				26.5		98.6		1.9								56.0			
S1 303	1,101.9	18.3	585.0			47.7		102.5				22.9		293.5										22.6	9.4		
S1 304	4,156.7	138.8	1,294.9		66.2	415.5		1,457.4				18.9	44.1	86.1	506.5									19.5	108.8		
S1 305	1,327.9	4.7	396.5			216.3		226.2		34.2		10.3	87.8	329.6										9.1	13.2		
S1 306	10,822.8	372.5	4,880.2		11.7	45.6	349.0		3,161.4	133.5	105.8	192.1	298.9	162.3	807.9		13.0	34.1	130.9					123.9			
S1 307	1,130.1	132.7	773.3			6.2	9.8	77.2				30.0	77.5												23.4		
S1 308	342.9	9.7	177.5			27.4	18.7	106.9		2.7																	
SB42	138.5	12.9	56.8			3.9		39.0				1.7	3.6	16.5													
SB43	12.7		12.7																								
SD38	634.7	27.7	67.7	32.0		16.8		131.7																357.8	1.0		
SD40	178.9		11.5	21.8		12.5		24.8																108.3			
SD41	97.7	18.0	13.7					48.2		6.6														9.9		1.3	
SK325	2,324.4	236.6	562.5	28.7		137.2	8.4	767.9	8.3			65.3	60.1	24.8	312.9									8.7	14.3		
SK326	107.9	2.4	1.7			2.0		17.4																84.4			
ピット	289.2	25.3	59.2			4.8	41.1	42.9															8.9	86.0	13.9	7.1	
N51(11, 22)	1,307.7	73.0	253.0			186.9		448.5															24.2	3.1	269.2	7.4	38.3
N51(11, 23)	177.0	23.6	71.3			29.8		21.4																30.9			
N51(11, 24)	101.2	22.3	43.6			12.6		18.4																4.3			
N5145表土	4,376.6	202.3	1,060.8	13.7	41.9	363.7		1,008.0		36.1		19.1	14.5	1,381.3										12.9	50.2	172.1	
N5145攪乱	1,780.8	46.9	382.5			14.2	111.6	29.3		449.2	12.0	82.6		64.7	44.6	462.0	30.2	6.3	11.9	32.8							
計	35,002.1	1,468.3	12,705.5	96.2	106.5	2,218.6	81.2	16.0	5.5	9,425.6	53.2	181.8	258.7	307.3	620.4	456.8	5,497.8	30.2	22.2	126.6	273.6	51.2	878.0	23.4	1.3		

※集計した器種の合計重量を計量した。なお、図版掲載した遺物は含まれていない。

報告書抄録

府中市埋蔵文化財調査報告 第249集

武蔵國府関連遺跡調査報告

宮町1-28-20外地区集合住宅建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書(1969次)

令和7(2025)年5月

発行 株式会社 マリモ
編集 株式会社 中野技術
文化財技術部
〒352-0011
埼玉県新座市野火止三丁目8番地7号
印刷 朝日印刷工業 株式会社
〒371-0846
群馬県前橋市元総社町67番地

表紙	アートポスト	菊判	153.0kg
見返し	上質紙	A判	70.5kg
本文	マットコート	A判	70.5kg
図版	マットコート	A判	70.5kg